明治二十六年二月五日發行

女鑑

第三十二號

東京國光社

女鑑第三十二號目次

女鑑
誠敬は道義の根本

論說
阿婉の傳を讀みて……伊藤武壽
女子要言（第二回續）……三輪田眞佐子

史談
土肥實平の妻の傳……三橋要也
梯悌子の傳……宮本好風

家政
看護法捷徑（九）……三笠舍主人
料理法（十二）……待月莽

學園
女子書牘文論（承前）……目黑和三郎
女服考（第十一稿）……有住齊

漫錄
●桂園翁直話　大口多比之●女誡和解　內藤傑聚●村田春海歌語　松野節雄●手鞠歌　あゝま●三井家婚禮式　長屋基彦
書師の妻……江見水蔭

文林
歌
近衛忠熈●毛利元德●鍋島直大●東久世通禧●佐々木高行●高崎正風●黑川眞賴●宮地嚴夫●小出粲●坂正臣●大口鯛二●岡部譲●上地信光●藤井行麿●佐々豐水●關大久樂●蜂須賀隨子●柳原愛子●小池道子●松平健子●三輪田眞佐子●安東菊子●尾崎すう子

文
あたらしき年のいはひてふ心を　尾崎すう子●うれしきこと　三輪田眞佐子●姬島日記（つゞき）野村望東子

雜報
●歌詠むわざ●あらぬ望●已を知る●孝女門前の落歌●雪●類題歌集

餘芳
みくるまのあと（つゞき）

敎の庭
歌文　數十首

●口畫……高橋松亭
●挿畫……武內桂舟

土肥實平の妻



女鑑 第三十二號

女鑑

誠敬は道義の根本

凡、人の道たる、仁義といひ、忠孝といひ、貞操といひ、節烈といふ其の目、分かれて種々なりといへども、歸する所は、誠の一字に外ならず。乃、誠の發動流行は、忠となり、孝となり、亦貞操節烈、百行萬善となるなり。我が邦の上古、曾て忠孝仁義の名なかりきといへども、既まめ人、まめ心、或は清く丹き心等の稱ありて、君と臣とは、父子の如く、父と子とは、一体の如く、上拱して下樂しみ、四海を合して、殆、一家の親ありしもの、歴史に傳へて明なり。知るべし。道の世に行はるゝと否らさるとは、忠孝仁義の名目あると、あらさるとにあらず

して、世人の心に誠あると、なきとによることを。若、夫、其の名に拘りて、其の實を遺れ、邇きを捨て丶、遠きを趁ふが如きことあらば、其の行、偶、忠孝貞操に類することあるも、亦、只、僞忠のみ。僞孝のみ。何ぞ眞の忠孝として、之を賞揚するに足らんや。

抑も、誠は人の本性なり。之を涵養し、之を啓沃せば、天下何人か、善人とならざるものあらん。然れども、動もすれば、物欲之を蔽ひて、其の本性を失はしむ。こ丶に於いて、世道の不振を來し、天下不忠不孝の子弟を生ずるに至る。而して其の物欲を防いで、其の本性を完うせんには、如何せば可ならむ。他なし。居常已が心を持すること、縝密にして、敬の念を放たざるにあり。

女訓唐錦に曰はく、敬の字、やまと詞に、つゝしみとよめり。これ、ひじりのみ

をしへのかなめなり。そも、いかなるをか敬といふ。たゞ、心のいます名なるべし。心といふ物は、むなしくほがらかにして、よろづのことわりを具して、よろづのわざをてらせること、あたかも、とゞまれる水、あきらけき鏡の、物のかたちを、さながらにうつすがごとし。心の物におほはるゝは、水の濁り、鏡の曇るに似たり。このゆゑに、よく心を治めて、うつり散らざるを、むねとす。それ、いかにとなれば、心を一にするなり。一とは、もはらなるをいふ。たとへば、衣服する時は、その衣をきる上にもはらに、飲食する時は、其の飲み食ふ上にもはらに、物いへば、其の言の葉にもはらに、ありけば、其の歩む所にもはらに、事に随ひて、外をまじへず、身にそひて、外に移らざるなり。云々、嗚呼。誠は人の本性にして、道を行ふ根本なり。敬は誠を涵養し、啓沃すべき方

法なり。人に敬なき時は、放僻邪恣至らざる所なく、人に誠なき時は、人倫絶え、獸畜群をなすに至らん。故に、男子を云はず。女子を論ぜず。敬を以て、誠を持し、誠を以て、道を行ふことを、分時も忘るゝこと勿れ。

論說

阿婉の傳を讀みて

伊藤武壽

凡そ古の人の行を記して、後の人に傳へ示さんこと、最も愼まざるべからず。又之を讀み聞く者も、大に心すべきことなり。何となれば、其人の行ひたる事は、誠に適れなり、勝れたることなりとして、其人には此上もなき譽となり、又はその人となりを見るに足るべき程に、感ずべき事たりとも、之を廣く、世の人の前に持

出だして、御身も之に傚ふべし、是ぞ善き手本なりといふべからざるもの、世には少からず。蓋し其心は、まことに優しき人情より、或は止め難き眞心より出でしも、其行たる、道理に背き、正しき筋合を蹈み違ふこと有り。或は已み難き事情、若くは其人の生れ付、身分等、其他種々なる關係より爲したる事柄にして、或は過ぎたる有り、及ばざる有り。過ぎたるは猶及ばざるが如しとは、聖人の敎にして、我等の世に立ち、事を行ふの手本とし、目的とすべきものは、過ぎたることなく、及ばざることなく、倚らず、亦常に變ることなく、謂はゆる中正不變の道にあるなり。之を平たくいへば、義理と人情との中を行きて、始めて人間たるの務全きを得べし。

然るに古より、世の婦女子には、親の爲、夫の爲にとて、操を破り、身を汚せる

もあり。學問技藝の爲に、女の道を忘るゝもあり。此等もたゞ、其心のみを取りて言はゞ、烈女なり、貞婦なりと謂はざるを得ざるに至らん。況して其他、種々なる行の、甚しく道理に背かざる者は、其人の身に取りては恕すべく、又は譽むべき者もあるべし。さればとて、一々之をもて、世の婦女子の鑑とし、手本となさは、思慮分別の定まらざる者をして、大なる過を作らしめ、途方もなき邪に陷らしむるに至るべし。豈恐るべきことにあらずや。

予曾て、婦女の鑑を示さんとて、我邦の賢婦淑女の傳記を調べしに、阿婉なる者の事を錄せる書、數多あるを見て、心大に喜ばさりき。何となれば、彼れ年若き女子の身を以て、大膽にも、數多き盜賊に刄向ひたるは、たとひ其心の雄々しくて、武士の娘たるに愧ぢずといへども、是れ婦女子の爲すべきわざにあらず。又

世の婦女子の手本として、學ばむべきことに非ざればなり。抑女子は、女子らしきことこそ肝要なれ。徒に力を弄び、其他總て、荒々しき男子の所作を學びて、喜ぶが如きは、最も宜しからず。況して盜賊なりとも、我より之を殺すは、道に背けり。わけて今日にありては、罪人なり。されど阿婉は、武士の世に、武士の家に生れたることなれば、今日を以て一概に、之を咎むべきにはあらず。阿婉の爲には、後の世に傳ふべき程のはたらきとも見らるべし。そを傳へんとて記すは格別なれど、世の婦女子の敎にとて記すは宜しからず。之を讀む人も、心して見るべきことなり。

夫れ女子の道は、貞に在り。貞とは常にかはることなく、一心に誠を盡すを謂ふことなれば、家の爲、夫の爲、道理の爲には、水火の中にも入り、身命をも抛つ

の心なかるべからず。されば雄々しき氣象は、なくて叶はざること、謂ふまでもなし。去れど勇氣の用る方は、場所に依るべし。國危く、家危きの時、親に代り、夫を助けて、一命をも惜まざるが如きは、まことに然るべき所なれども、阿婉の如きは、みだりに危きを犯せるものにて、世の婦女子たる者の、見習ふべきわざにはあらず。然るに、前號の女鑑に端なくも、阿婉の傳の載せられたるを見ければ、予は之を讀みたる年若き孃等の、心せられんことを思ひ、已み難きまゝ、聊か此に、一言の老婆心を述ぶるなり。事こそ別なれ。今の世の女子は、兎角に荒荒しくて、僅に書讀み藝を知れば、女の道を打忘れ、男らしき樣をなす者多しとて、世に誹らるゝを聞き、うたてきことに思はるゝまゝ、事の序に告ぐるになん。

女子要言（第二回續）

三輪田眞佐子

第五、言語は簡婉に、擧動は靜止にして、男子と明かに、品別あるべし。人道は、抽象的の空想より出づるものにあらずして、人生まれながら、自然附隨する行爲の規則なり。故に古人曰はく、道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらず。と信に然り。而して女子の言語、簡婉ならざるべからざるものは、輭弱なる女性に伴ふべき道なり。若舜母の如く、嚚ならんか。幾千歲の後、尙人の非難を免れず。愼まざるべけんや。擧動の靜止なるも、婀娜たる女子の自然なり。彼の海棠の花は、松櫟の如き枝に咲かざるを見て、然る所以を知るに足るのみならず。禮記曰、有和氣者、必有愉色。有愉色者、必有婉容。と果して和氣は、女子の常性なりせば、動作の靜止は、女子の本分たるや、疑なし。是を以て、女

子たるものは、男子と其の作法も異なり、禮義も差なかるべからず。故に支那の古俗は、七歳以上に達せば、男女席を分かち、什物を取授するにも、決して手を以てせざりき。今の人之を評して、迂濶なり頑固なるのみならず、反つて男女の和氣を破るものなりと云ふも、吾は之を當然の道と信ず。何となれば、此等は單に、譬言に過ぎずして、必ずしも、居所及び、物品の取授のみを、斯くせよと定めしものにあらずして、男女須らく、品別あるべしといふ意にあればなり。吾が師梁川星巖翁の夫人紅蘭女史、自分專用の乘物あり。或時葛仙なる人、其の乘物を、女史の知らさるに借り用ゐたりき。女史之を聞き、大に怒り、忽ち斧を以て、其の乘物を微塵に破り、而して薪となせり。是れ少しく、過激なりと雖も、男女濫に相侵さゞること、宜しく斯の如くなるべし。而して其の後、女史菊譜に、

後侍氣味愈〻馨烈、離俗容姿倍〻麗嫺。と題して、吾に與へて曰はく、女子は菊花の如く、高尚ならざるべからずと。吾大に之を感じ、表裝して額となし、今尚恭しく。室に掲げ居り。實に芳名を、後日に垂るゝ婦人の思想は、現今未婚の男女、劇場に於いて、相耳語し、以て笑倒し、教會其の他の集會に於いて、相乱坐し、以て粗暴の風をなす蠢々たるものをして、赧然たらしむるに足る。尚一言せん。吾は男女相疎んじ、相敵視せよと云ふにあらずして、親みて乱るゝ勿れの義を云ふなり。

第六、恭謹ならざるべからず。勤勞せざるべからず。女子にして恭謹ならさらんか。良人の過を補ひ、一家及ひ一身の禍を、未發に防ぎ、以て家族團欒の長たる能はさるのみならず、愛兒の教育をなす能はず。試みに見よ、古今其の妻

の口より、秘密を漏らされ、其の娘の爲、一家衰亡を招きしもの少からさるを。亦勤勞せさらんか。家政を能くして、良人の業を助け、一家脩まつて、一國興てる大任を全うする能はず。故に司馬温公の家範、婦人の六德に、此の二者を加へたり。且敎女遺規に曰はく、古者生レ女、三日臥二之床下一、弄二之瓦磚一、而齋告焉。臥二之床下一、明二其卑弱主レ下レ人也。弄二之瓦磚一、明二其習レ勞主レ執レ勤也。と這は頗る、嚴重に過ぐる嫌なきにあらずと雖も、亦以て、恭謹及び勤勞は、女子に取りて、忽諸に附すべからさるを知るに足る。或は曰はく、日本女子は、人に屈從する、犬の如し。而して終始、已の意を貫徹する期なければ、不如意の極、潮干に見えぬ沖の石の、乾く暇なき如く、日夜憂愁の涙は、袖に湿れり。男子少しく、無情を辱ぢて可なりと。亦曰はく、日本女子は、膳椀鍋

釜、及び夜具の支配より、靴の掃除に至るまで、悉く手を下さゞるを得さるを以て、五尺の身体を、粉末にして勞するも、尙足らず。常に女子は、男子より、機械同等に苦役され、少しも人間の興味なきは、氣の毒ならずや。故に生活を、彼の國に倣ひ、麺包、牛乳を以て、常食とせば、妻女は、朝起して米麥を炊ぐを要せず。香の物、壜中にあれば、妻女は、手を糠味噌中に沒するを要せず。汚衣も洗濯屋に頼めば、妻女は、氷結を溶く苦心を要せず。左れば女子、綽々たる餘裕を得て、文字を讀み、宗教を話すを得べし。亦快ならずやと。其れ實に然らん。吾も願はくは、害なくして能ふべくんば、斯あらんことを。然れども是れ、固社會改良論として議すべきも、今日の日本の民度を以て、之を能くし能ふか。吾は知らさるなり。且善は幾程なすも、以て過ぐるものにあらされば、世論は兎も角、

女子たるもの、斷乎として、自ら能ふ処を尽くせは、譽むるものあるも、誹るものはなからん。故に吾は、恭謹と勤勞は、欠くべからさる女徳なりとなす。

第七、禮義を重んじ、辛苦に堪ふべし。鼠を見るに体あり。人として禮なからんや。而して國の風儀は、必ず閨門より起てる。是を以て、禮記に、婚禮者、禮之本也。と云ひ、詩の關雎を、首卷に置く所以なり。乃ち女子の、長者に順ひ、尊者を敬するは、禮の由て起こる所、若者を愛し、窮者を慰むるは、義の由て生ずる所なり。若女子にして、良人を三助同等に待ひ、兩親を朋友の如く、兒童を犬猫の如く遇するのみならず、賓客に接するに、出入者を以てせんか。夷狄たらさらんと欲するも能はざるなり。加之。婬亂の風も、輕薄の俗も、禮義地を拂ふより行はれさるはなし。謹まざるべけんや。且辛苦に堪ふる忍耐力なくんは、酒に

醉ひ、色に耽る良人を感化し、北風窓を撲ち、梟枯木に鳴く霜夜に、目を覺ます赤子を育て、視力尽き、股肉衰へ、徒歩する能はさる舅姑の手を取り、庭園を逍遙し、蝶を指し、花に培ひ、以て女道を全うする能はさるなり。故に女子たるものは、辛苦を雪中に忍び、以て彼の寒天に、紅を誇る梅花をして、反つて避けしめたる中將姫の如く、忍耐の力なかるべからず。然るに天下、良人の微怒に堪へずして、親里に走るの妻君はなきか。沐湯の加減、火燵の適度を量るの勞を厭うて、老親を安んぜしめさる女子はなき乎。是れ戒むべき要点なり。其の他、儉約、綿密等の德、數ふるに遑あらずと雖も、一を以て、他に類推すべきものは、詳記するの繁を省かん。請ふ讀者、自ら工夫する所あれ。然れども、省かんと欲して、省く能はさるものは、以上の論ぜし條項は、古今各箇人の想像より、根底なき標

準を定めしならん。豈守るに足らんや。と云ふ疑迷を氷溶せしめんが爲、次の一節を加へん。

史談

土肥二郎實平が妻　　三橋要也

土肥二郎實平が妻は、その性質いと賢く、才智人に秀でたり。又、慈惠の心深くて、賤しき婢僕に至るまで、常に惠みを施しつゝめし使ひけれど、人々皆、主の御爲には、命をも惜まじと、いと忠やかに事へけり。治承四年、蛭ヶ小島の流人源頼朝、平家を亡ぼして、父祖の家を興さむとて、兵を起こしぬ。時に、所在の武士ども、やや心を寄する者ありしが、平家の、いまだ眞盛なる世の中とて、東國に名高き武士どもの、もとは、源氏の家人なりし人々すら、皆、その勢に懼れ、今迄は、誰とて、刃向はんとする者もなかりしかど、實平も、始のほどは、此の事いかゞあらむ。も

し、忽に、平家方にうち亡ばされなむには、徒に反賊の名を取りて、弓矢の名をも汚しぬべしと、思ひ案じて、猶豫ひ居たり。さるに、妻は、早くも、時の勢をや察りけむ。源氏を助くべしとて、切に實平にすゝめければ、實平、遂に心を定め、其の子遠平をうち連れて、賴朝の味方に參り、二心なく事へけり。かくて、賴朝は平家方なる大庭が徒と戰ひしに、時運いまだ至らざりしにや。もろくもうち敗られて、味方は散々にうちなされければ、せん方盡きて、實平と共に、土肥の杉山の中に隱れ入りぬ。敵の兵ども、雲霞と群れ集まりて、山の周圍を取り卷きつれば、内外の通路もとだえ、糧は、旣くも盡き果てゝ、ほと〳〵、餓ゑ死ぬべき有樣となれり。實平が妻は、かねて、かゝる事もやあらむと思ひはかり、己が郎黨一人と、髮を剃らせ、法師の姿にいでたゝせ、糧をば、簀の中に充て、表に樒を折りかけて、これをかくし、閼伽桶に酒をたゝへ、修行者の、花つむさまに、いだしたてゝやりぬ。かくて、しのび〳〵に、糧を賴朝がもとに贈らせけるに、杉山をとり卷きつる兵ども、絶えてあやしむ者もなく、賴朝主從は、これによりて、餓を免れ、遂に、ひまを伺ひて、杉山を逃れ出づることを得たり。妻また、實平に消息して、三浦、畠山がた

たかひのありさま、及び、三浦の一族が、安房、上總の方へ下りし事ども、いとつばらかに告げしらせければ、賴朝は、機を失はずして、房總の地におしわたり、是より、やゝ〳〵に勢を得て、關東の諸國をうちなびけ、遂に、平家を亡ぼして、その志を遂ぐるに至れり。

さても、土肥實平が、賴朝を助けて、大なる功を成さしめ、源家に名高き武士として、忠勇の名を、後の世にまで流しつるは、ひとへに、この妻の助けによれること、言ふも今更なりや。實に、かくありてこそ、當時の武士の妻たるにも耻ぢざらめ。あはれ。今の大御世は、また、源平の時の如くならず。國の内には、大君の御稜威を畏み奉らぬ輩こそ無けれ。海の外には、鷹の如く鷲の如く、虎の如く獅子の如き國々ありて、その勢を振ひ、機を得て、人の國をば搏擊もし、呑噬もせむ有樣なれば、い對ひ立てる國民の心は、また、かの禁園の花にうち眠れる胡蝶を追ふが如きたぐひにあらず。弓こそ引かね。太刀こそ擊たね。平常は、學の藝、商の業に、巧を競ひ利を爭ひ、智の力を戰はせ、金の光をくらべ、優れるは勝ち、劣れるは敗るといふある世の中に、優りて勝たむと心ざし、事あらむ曉には、劒の霜を履むは物か

は。砲の煙、彈丸の霰を犯しつゝ、仇なふ者どもをうち平げて、朝日いづる國の光を輝かせ、白雲の下り居向伏す限りの國々をば、日象の旗手の下にうち靡かせて、我が大君の御馬飼部たらせ奉るべき今の國民の責任の、重くして難かるべきは、流れ疾き宇治の川瀬を先渡りせしにも、壁立てる鵯越の逆落しに、我が乘馬を捧げしにもいやまして、重きが上にも重く、難きが上にも難かるべし。さるにても、この國民の現在の妻となりて、内助のつとめを盡くし、將來の母となりて、教育の責を全くせむとする世の女等よ。古の人に鑑みて、今の世の女たるに耻ぢざらむとならで、常に、身の分に從ひて、盡くす所あらむと心がけでやは。

梯孝婦の傳

宮本好風

孝婦名は悌子、姓は梯氏、父を民也といふ、民也は舊の越前侯の侍醫にして、内外の科、老練の國手なり、いま世に醫名の高き橋本綱常など、いと親しき交りなりき、民也男子なく、三人の女子有りしが、長女は同國舊の勝山藩の士族前野某に適き、末女は舊の越州藩の士族安田某に嫁し、悌子は其仲女にて家に殘れり、然るに

民也、同藩の南部某の子の文造といへる、幼きものを養うて子とせしに、稍長ずるに及びて、これに悌子を配偶しゝに、頓て一男一女を設けたれど、民也の喜び限りなし、いく程もなく、文造陸軍々醫に出身し、家政いと賑はしく、盛に月日を送りけるに、如何せん、いにし十一年の九月の末、文造偶ゝ病に罹り、哀れはかなく身まかりぬれば、悌子の歎き一方ならねど、せんすべなき道なれバ、泣く〱新寡の身とはなりぬ。今とてははや、巾櫛を奉ずべき便もなく、憂き歳月の朝夕なれども、父母の孝養怠らず、かゝりし中にも、又不幸にして、男兒はいまだ、三歳にも滿たざりしに世をさりぬ、殘る一女をむら子と呼ぶ、此むら子を樂しみに、をしへ育てて過ぎつる歳月の間、上にはふたりの親、下には此むら子、僕婢を除き、合せて四人の屬、一室の内にいと睦まじく、好合和樂、瑟琴を鼓するさまにぞ世を送る、民也南宗の畫を善くせしかバ、刀圭の餘暇には、山水竹石など揮ひて、みづから娯しめり、尤尺八にたくみなれバ、余がせちに請ふ時は、内氏の三絃、悌子の箏などゝ合奏して、人をも樂しましめ、已れもいと興じてけり、余は民也と年久しく、わりなき文雅の交りにして、ゆきゝの間もいと繁ければ、又よく其人と成りを盡くしゝに、

ろが性甚潔癖なれば、家の内の洒掃隈なく清らなること、見るさへ心地ぞよき、悌子かゝる潔癖の父の許に長じぬればとて、能く其意向を盡くし、薬室書齋の洒掃を始め、朝夕饗膳の甘毳まで懇に、躬みづから操り理めて、一つとして父母の心に適はぬといふことなからしむ、去りとて民也が性温良なれど、かゝる孝婦を酷使して、かく甘心を得ると云ふにはあらず、悌子天性の順和なれど、親子の間、おのづから好く和穏せり、さて此悌子の人と成りをいはんに、孝はいふも更なりけるが、又容儀うるはしく、加ふるに萬の業にさとく、中にも婦人第一の業なりける裁縫に工みにして、敏く捷かりしとぞ聞えし、又箏曲の絶妙、譬へんに詞なし、余も亦わかき頃より、切に箏曲を嗜みて弾き習ひ、年老ゆる今日までも、此わざ棄ざりける程にあれど、そがわざの進みかねつれば、只人のたくみに掻き鳴らしけるを羨みしのみなれど、さしもに宿好の道なれば、義甲の運び絃の序は、幸ひ餘りに忘れざりければ、悌子と對撫せし事もしば〳〵有りけり、悌子の師は本西京の人なれば、其くみてふものゝ外は、わが東京にては、いづれも耳新らしう聞し曲のみ多かりき、中にも其名の、能く衆人の耳に慣れたる松竹梅なんどは、東京の弾きざまとは大いに

たがひて、其間ふしいと優美にして、指法の細やかなること、又いふべくもあらず、悌子がたま〱、此曲を掻き鳴らし、工みさは、初めより終りまで、序破急のしらべ、左と云ひ右と云ひ、其細やかなること、義甲の輕く迸るさま、露ほどもしぶりさはることなく、優に艷しく、いと妙なりき、其他くさ〴〵の曲も多く掻き鳴らししが、悌子の本より好みける曲といへるは、いはゆる組てふものにぞ有りける、余が嗜みける曲といふも、亦此組なりければ、或日悌子、余に語りていへらく、君には公の務もあり、殊に厭はしうもあらんずれど、表組を始め奥の組まで、殘りなく對撫し、絃々の間に於て、指法の疑はしきに逢はゞ、互に換へ質さんことぞよからめ、其互に忘れたる處に逢はんことは、大かた稀なるべければ、ひたすら此思ひ立を許し給ひてよ、許し給はゞ誠に妾が幸なりと、いと懇に請はれ、其父母も亦余に勸めけるに、余は素より好める道にしあれば、うれしくうけがひて、時としては土曜日に給はりし半日の暇など、外つかさの省をまかりし歸途より、悌子が許を訪ひ、かねて約せし如く、絃々還撫の疑を質し、互に換へ彈きつるに、余が疑ひし處は、悌子幸に胸に記し居たれバ、余が得る所尠しとせず、悌子の忘れし處は、余亦幸に思ひ

ひ出だしゝかバ、悌子に指し示しゝことも亦尠からず、其數曲覆撫の中、只中組にて浮雲の曲(俗に雲井弄齋と云ふ)奥組にて雲井の曲の指法のみは、悌子の忘れたる處多かりしに、余は幸に此二曲の指法一絃だに忘れざれバ、悌子大いに喜びて、懇に承け傳へたりき、其餘の曲の疑は、皆互に質し互に換へ、しかして終に三十餘曲の組、及び段調子のもの等、憾みなく全うせしことを得たり、此時悌子うれしう忝しとて、「結ばゝれとけぬ心の琴の緒もすぐある糸にひかれぬるかな」などよみて示ししことも有りけり、さて此悌子が美事の隠れたるは、余これを言はざれバ誰か知る人や有る、箏曲の妙手の如きは、抑末にしていふもおろかなり、其美如何といへバ、人倫第一の孝にてぞ有りける、あなをしゝ、孝の行の世に著はるゝもの、多くは貧窶の者にしあれバ、男にもせよ女にもせよ、幼きも長せしも、貧窶の者の孝は、人に憐を受くる事多く、はた己れが家居も窄くちいさければ、四つの隣も近く、又其身の外面に出づる事も繁ければ、おのづから人にも知られ、世にも顯れ易きは、本より其理なり、抑悌子の家は、させる金穴とも思はれねど、又家計の兎や角と心せし營にも非ざれバ、飯かしぐ事水汲む事ばかりは、皆婢女に操らしむれど、朝夕父母

に進らする饗膳の魚蔬などは、皆悌子躬みづから其割烹をとりて、いと懇にとゝのへしとぞ、かゝる事しは、世の常の婦女の皆しかすべきわざにしあれど、悌子の始終の如きは、父母の心に一點適はぬ事とてなかりければ、父母よりも亦あらき詞の一言だに、悌子に及びしことなしとぞ、民也が余が家を訪ひ來たりし時など、余が妻深く悌子を賛美せしに、民也詞を讓りて、別に取るべき事とてはなけれど、我が夫婦の命せしことをいとふ色などの、顔に形はれたることは、幼き時よりいまだ一度も候はず、只取るべきは此一つなりと、笑ひながら答へき、是いはゆる、其父母昆弟の言を間せずといへる本文に違はじ、さて其一事を擧げて云はんに、こはおもふに悌子も心附かず、又民也も今日までも知り得ざるまじけれど、或年の十二月の半の頃、余偶日曜日の休暇をもて、民也が家の近きあたりに行くこと有りけり、そが序もて民也が許を訪ひけるに、民也は偶家に在らず、余悌子に向ひて、けふ閒暇におはせば、箏の對撫せばやと云ひしに、其時悌子父に命せられしとて、障子を張りかへんと、事ら其事に用意せし有りさまなれぞ、こは大かたの勞ならめ、さらば余は直に歸るべし、又の日序あらば年の内に、今一度來らんとて、別を告げゝれば、悌子の心の中

こそおもひやられ、余に從へバ父の命に背き、父の命を守りなバ、余にいうたかりの心つかふ情やあらん、ろがふたつの間に迷ひて、余の暇乞を許し兼ねたる色の面に形はれしさま、余竊にこれをさつし得てけり、母も傍に居て箏彈けよと勸めしかど、いと和かに言ひなして、遂に余の暇乞をゆるしぬ、しかして余は民也の家を出で、五六町バかり歸るさの途にして、民也の外より歸り來たれるに逢ふ、民也けふは何處へ行き給ひしや、余が家をバ訪ひ給はざりしやといひしまゝ、余が今し程、悌子に逢ひし時の狀を告げ語りしかば、民也いと惜しみ深く恨みて、是非に歩を返し給はれど、強て余が手を挑り引いて家に還りぬ、其時悌子前に余が訪ひし時の狀を薄らかに父に陳べければ、父の民也笑ひて、さまでの心づかひはすな、其事けふ皆終へんにも及バじ、いざわれ汝に代りて其事をとらまし、早く箏彈きいでよ、われも聞きながら、しづ〳〵事を終へんと云ひければ、悌子は又父の其詞を否みもせず、余が爲に兎角せし心づかひも打和ぎて、常の如く數曲を對撫して慰みつ、かくいへど民也は、嚴しう悌子に事をおはするかたくなの父のさまにしあれど、左にはあらで、悌子が餘り、物每にひかへ勝なる資質にしあれば、親子の間もかくにぞ有りけ

る、そを初め余がすげなく還らんといひしを、心つかひしつゝ、告る別を立ち送りしは、いか許りか、心苦しかりしことならめとぞ思ひやられし、其婉娩おほむねかくの如し、前に述べし如く、兎角まづしき者の孝は顯れ易けれど、悌子の如き家計に不足なき身にしあれば、埋もれて世に知られんことの鮮きは、いと憾ならずや、さて前の事の對擧の爲、或は民也と棋など圍まんが爲、しば〳〵彼の家に行きたりしに、或日悌子何の故やらん、奮然として髻を剪り、頓に貌を變へたりしに、言語顔色少しも常に變らずして、笑ひながら出で來たり、余を視て常の如く禮しあしらへり、余駭いて、其髻何故ならんと問ひけるに、悌子哂ひてえも云はず、傍に居並びし兩親に問ひければ、兩親も哂ひながら答へて、我が兩人に何とも其情を告げず、此頃俄にあの姿とはなりぬ、そも〳〵彼が髻剪りて、わが兩人に其情を展べたりしは、およそ百の事、御兩親さまの仰せに背くべき理なく、其の上何一つだに、御ゆるし蒙らで計らふべき事とてはあらねど、こたび髻剪りし事のみは、御父さまにも御母さまにも告け參らせずして、竊に計らひし罪は、千ひろの淵よりも深かりければ、そが恐れ少からねど、是のみは偏にゆるし玉はれと、深くわび入りければ、せんすべ

きやうもなしと、因て重ねて其謂を余に語りけるに、抑彼にはむら子といふ一女も有り、そが上彼が姿色もいまだ衰へざれど、此むら子を家に殘し、彼に再醮せよと、しば〳〵勸むる親戚ありしが、此頃其事をせちに迫られしかば、彼心に思ふまゝを親戚に陳べて、勸め玉へる御情も忍びがたけれど、今わらはが再醮をゆるし、父母の膝下をはなれなば、温凊の奉を虧くのみならず、饗膳縫紝の任、誰か妾に代りて理むべきとて、其勸むる言を絕たんが爲に、かくは貌をかへてけり、はた先夫の靈に對しても、心よからぬものをとて、其時「一年に春はふたゝび來ぬものを散りにし花のいかで咲くべき」とよみて、我が夫婦に見せ參らせしと、民也つばらに余に語りてき、こは民也とわりなき交の人々と、皆能く知りつる事にぞ有りける、さて又悌子もおのれと心附かず、民也も今に知り得ざる事になん有りつれど、或日余等の對撫せむやと、悌子が許を訪ひし時に、民也は折ふし病ふの人に藥せんとて、近きわたりの家に行きし後なりけるに、悌子かやがて余に授けたりし箏の絃の、いとゆるかりければ、余悌子に向ひて、そが絃の餘りにゆるかりしよしを云ひければ、悌子笑ひながら、そは此頃、父が締めてたぶとてしめたりしが、妾が彈きつるにさへ、餘

りにゆるかりけれど、老の手にて心せしものをと、忍びて彈き居しかど、けふは幸君の來たり彈き玉ひしにかこちて、締め直さばやとて、十三の絃殘りなくしめ直してけり、頓て民也病用を終へて歸り來しに、悌子父に向ひて、此絃折かくしめ玉はりしかど、餘りにゆるきがまゝ、けふ宮本君に、此箏進らするにかこちて、今殘りなくしめ直しゝに、音もいとさえてけりと、やさし氣に咲ひて告げゝれば、民也も咲ひて、そはよかりし、などか早くはせざりしやと、悌子が心せし程にも思はぬぞむつましき、かゝる瑣末の間にしも、親をうやまふさま見るに足るべく、情の深きも推して知らるべし、余が民也と閑話の際、あるは棋を圍みける時なんど、かたへに居て、余が爲に事執り行ふに、さながら父につかふるの情あり、又余が家に來たりて余が妻に物いふこと、動作に禮を盡くせること、亦其母につかふるにひとしければ、余が妻も感歎の餘り、民也夫婦に向ひて、しば〳〵稱賛せしに、夫婦共に詞を讓りて、答へしこと、前に述べたるに同じ、重ねても〳〵、又其父母昆弟の言を間せずところ云ふべけれ、かく天稟の順和と、節操の貞淸とを、試みに貧しき者と、地を易へて視ましければ、そが行の早くも一郷に知られ、其名も遂に天下に洽ねか

りぬべけれど、悌子の身はそれとも違ひぬれば、そが常の言語動作の微細を、永き歳月、視聴の間に於ておもひ回らさねど、かくは知り得らるまじ、凡世上の寡婦の、いまだ姿色の衰へざるものを見るに、衣裳粉粧に心するものもまた多し 多きが中に、悌子の如きは絶世の美をもて、殊更春秋にも富みながら、身の装飾には露ほども心せず、道遙々余が家に訪ひ來たりし折なんど、絹縮緬にてこそあれ、先夫が著たる羽織など、只女子の尺度に易へしのみにて、いと淳朴の風を存せし大きやかなる紋にて、ふときまゝなる紐など、しどけなく結びてけり、こは夫の遺物を忘れがたき情にやしらねど、身の装飾に拘はらぬこと總てかくの如し、去りとて潔癖の父の許に成長ぬれバ、髻剪らぬ前、剪りての後、清らに梳ること浴みせしこと、歯刷ふことと爪剪ることなどは、世の常の人よりも勝りて清く、只仮の装飾をすてゝ顧みざれど、一點なまめかしき風情なし、又悌子の女むら子が、嘗て赤阪の女學校に通ひし頃、其校に於て洋服を用うべき事のありたるに、家に不用の絨若干尺蓄へ有りしを幸に、洋服裁縫の圖書を購ひ求め、其法に倣ひて縫ひ修めたりしが、少しも違はず、能く女が身に稱ひたりしとぞ、又或時余が方にやむごとなきさはり有りて、久

しう歩の踈かりし折、悌子細々とふみ書いて、郵の便に寄せ、懇に皆の屬の安否を問ひ、そが文の末に、いと拙く恥づかしけれど、わらひ草に進らするとて、「此ごろは玉の小琴の緒もたえて甲斐なくかよふ軒の松風」とよみておくりこしゝかど、惜しむべし、余は此わざに踈けれバ、遂に返しの歌もよみえざりき、小さき事にしあれど、こも又優にやさしきことならずや、かく間然すべき事だになき無瑕の璧ありしも、たまく力有る者の夜半に來たりて誘ひなバ、人の力もていかんとも挽き回すべきやうもなし、哀れことし明治二十三年五月の二十日、齢僅に三十七にして、ふたりの親姉妹、及びむすめ村子の五人に先だちて身まかりぬ、此殘る五人はいふも更なり、余が心に於ても、亦哀しう悼まれけり、そが野邊の送りのふし、余に事のさはりありて、參り會はざりける殘んの憾多けれど、今憶に記しゝ事のおほむねを擧げて此傳を作れ、程なく來つる盂蘭盆會の新靈祭の祠堂の上、悌子が座しますみくらゐの前に供へ給はんことをと、老の筆とり、一通をかひつらね、梯國手の許に贈りぬ、時に明治二十三年七月のはじめ、

家政

看護法捷徑（九）

三笠の舍主人

（十）脉搏測定法

一大人の脉搏は、通常一分時間、六十五搏乃至七十五搏の間に在り、平均七十二搏を常數とす、之を平脉と云、但、小兒は頻數にして、年齡に依りて同からず、八九十搏乃至百搏以上に及ぶ、（嬰兒は最も頻數にして、百二十搏に及ぶ、又老人及婦人は、脉搏の數、稍多きもの也、

二脉搏の常數を超ゆるものを、數脉と云、特に熱病者に於ては、脉數增加して、八九十搏乃至百二三十搏、猶甚しきは、百五十搏に至るもの有、又病に依りては、其數減じて、四五十搏、稀れには猶其以下に降るもの有、之を遲脉と云、通例、脉の增減は、体溫の增減と一致するものにして、亦病の增減、進退、をト知するに緊要なる一の尺度を爲すものなり、

三脉搏を測るには、手關節の少し上の方にて、拇指側に、看護者の方の手の、示、

中、環、三指の指尖の腹を當て、他手に懷中時計を取り、一分時間に搏動する數を算ふべし、(通常二十秒、若くは三十秒間の數を數へ、其得たる數に、二若くは三を乗ずれバ、一分時間の搏動數を得るなり、一時に數人の脈搏を測るには、此く爲すを簡便とす、)其得たる數を、其都度脈度表に記入すべし、

四　脈搏も亦体温と同く、朝夕二回、体温と同時に測定するを法とす、其他、臨時の測定は、亦体温と同く醫士の命に從つて測るべし、

五　多く血液を失ひたる患者、若くは衰弱甚しき患者にありて、脈搏極めて幽微にして、指頭に觸れ難き事有、此時は、左胸乳頭の稍下内方にて、心動ある部に手を當てゝ、動悸の數を測るべし、

六　脈搏は亦病の外、七情の感動に依りて、增減する事有、特に婦人及神經質の人にありて然りとす、故に看護の任に當るものは、亦常に患者の性質を知悉する事、肝要の一事なり、

其他、脈の種類猶甚多しと雖、醫士に非ざれバ、一々撿定する事能はず、

(十一)　呼吸測定法

一呼吸は、肺臟及胸壁の縮張に依りて、興るものにして、其狀、恰も鞴の作用に異ならず、大人の一分時間の呼吸は、大抵十四五回乃至十八回を常度とす、此數を超るものを、呼吸促迫と名付け、通常四十回前後に昇り、猶甚しきに至りては、七八十回乃至一百回に及ぶもの有、心臟、肺臟、其外總て胸部の病、及諸多の熱性病、痛ある病は、皆所謂呼吸促迫を來すもの也、

二看護者は、常に患者の呼吸の模樣に注意し、其安靜なるや、深長あるや、又は疾速なるや、淺少なるや、若くは主に鼻にて呼吸するや、或は口にて呼吸するや、等を察すべし、呼吸の際痛あるものは、吸息時に患者顏を頻縮するものなり、

三呼吸を測るには、看護者一方の手掌を、患者の胸上、又は腹上に輕く置き、他手に懷中時計を取りて、一分時間の呼吸運動の數を算して、其都度之を呼吸表中に記入すべし、

四上に擧し、体温、脉搏、及呼吸は、同時に一表に記入すべきものにして、之れには一定の表式あり、其記入の方法は、宜く醫士の指圖に隨ふべし、

料理法（十二）

待月菴

○粉類の事

辛の粉の法

一炎暑に五六日よくほし、臼にてはたき、皮を去り、又能く細かにはたき、絹ふるひにかけ、紙のふくろに入、火の氣のあがる所に釣置、つかふ時、すこしまへに、あつき湯にてかためにねり、氣のぬけぬやうに、ふたを致置、つかひ候事、酢にまぜ候時は、茶碗にてふり立候へば、からくなり申候、

葛の粉の方

一早春葛の根をほり、上皮をよくこそげ、土氣を洗去り、叩きひしぎ、木綿の袋に入れ、桶に水を入れ、袋をひたし揉出し、白き水になるを、幾度も揉み出し候へば、根の葛、みな取れ候なり、此水を又木綿袋に入、七八度こし、少し粕出候を捨、さて又白水を、外のをけへ追々に入替、ごみなど幾たびも取捨、右の白水を、絹にて三度ほどこし、又桶に入置、三日程立、右の桶に呑口を付、上水をぬき捨、また外の平ものに入、だん〲に水氣を去り、糀ぶたなどに入、天氣よき日に、一ヶ月位は

し、能かわかし取置候事、

一寒ざらしは、寒中に、右之通製するなり、

栗の粉の法

一栗を常の如く、湯煮をして水氣を去り、上皮のこげるほど鍋にていり、しぶ皮をさり、すり鉢にてよく摺、板の上にてもよし、叩きてかわきたるを、とほしにてこし、しほをよきほどに入、つかひ候事、

山芋の粉の方

一自然生を、よくゆでかわかし、皮を去り、日に干、とほしにてこし、遣ひ候事、

大豆の粉

一青大豆ざつといり、なまくさけ去りてのち、粉にいたし候事、

香煎の粉

一ヨクイニン十三匁、サンセウ四匁、ナンピ五匁、大唐米十匁、ウイキヤウ二匁一分、右いづれも煎りて粉にいたし、絹にてこし、さゆにて用う、祇園香煎これあり、

藥香煎

一黒大豆一匁、餅米一匁、黒ごま三分、山椒六粒、右煎て、燒しほ一分入、粉にしてふるひにかけ、白湯にて振立、常に用ゐてよし、食後に飲めば、毒にあたらず、

○酒の類

忍冬酒の法

一燒酎一斗、白米餅四升、外に白米餅二升を糀にいたし、忍冬花三十目、かげぼしに致、白ばらの花三十匁、是も同樣陰干にし、桶壺の類に入、ふたをいたし、澁紙にて包、七日目〳〵位にかきませ、五七度も立、五十日位にて、ふたを取候事、

麻地酒の方　豐後國產

一上白米五斗、酒に入る一日まへ、水にかし、食に蒸、よくさまし、糀五斗、但一晝夜水につけ、むしねさせて、酒に入るゝまゝ、一日一夜澁紙にひろげ、よくひやし、水四斗、右の食糀を交合せ、壺に入押付、尤少し中高にいたし、水を入候時、食の上に板を置、めしの動かぬやうにつき込、右の壺、土中七寸程下に埋、ふたをよくして澁紙に包、上を土にてうづみ、人のふまぬ所、風の吹貫よき場所に、

寒中仕込、翌年六月に、口を明るなり、

同法 肥後流

一上餅米白五斗、上粳米白五斗、右別にいたし、寒前、水にて二度洗、一番の水を捨、のちの水其儘、七日置、八日目、常の如く蒸、飯にいたし、尤こしき二つにて、別別に蒸、粕六斗、水六斗、但前に遣ひ候水なり、餅米の水三斗、粳米の水三斗、右糀とよく合せ、すこしさめ候時、半切桶に入、もみ合せ一夜置、翌日臼にて搗き、粒の半分過、つぶれ候程つく、七日の間毎日二三度づゝ、手にて揉合、上下にかきまはし、暖成ところに置、八日目に瓶に入、ふたをいたし、澁紙にて包、埋置、翌年六月土用中に、口を切る、甘く色しろき濁酒となる、

葡萄酒の方

一ぶだう一粒づゝ押つぶし、汁をよくしぼり、鍋の中に入、炭火にて一沸せんじ、さまして、焼酎三分一加へ候事、

一龍眼肉、上皮を去り、焼酎ひた〳〵に漬、十四五日程置、醬油の如く、汁出たる時、龍眼肉を取上、布にてしぼり、粕を捨、右二種を交、遣候時は、ぶだう酒の

正眞なり、

薯蕷酒の法

一薯の皮を去り、厚きは半分に割、ざるに入、鍋に湯をわかし、ざるともに湯に漬、すこしの間置、其儘あげ、雫をたらし、盆にてよく擂ひしぎ、冷候時、酒を入、ねり酒の如くのべ、徳利に入置、たび／＼燗をして呑候事、

豆林酒の法

一黒大豆三合、鍋にても炮烙にても、炭火にて随分あつく致、鍋をおろし、豆を入、遠火にてあたゝめ、酒二升、右の豆よくさめたる時入、七日すぎて、豆をこし捨候事、

桑酒の方

一桑の實汁一升、よく熟したるを擂つぶし、布にてこし、鍋に入、炭火にて焚、青臭き匂を去り、能さまし、焼酎を合せ候なり、焼酎一升一合つかひ候時、白砂糖を合せ候事、砂糖一盃、焼酎一盃、火にてあたゝめ、解たる時、こしてさまし、右の桑酒に交候事、

女子書牘文論（承前）

目黒和三郎

○作例つゞき

梅見に誘ふ文

前回にも云へるが如く、誘引の文の如きは、もと禮を盡くし、儀を備ふるものに非ず、心しりの好意上に屬するしわざのものにて、多くは同等良友の上に行はるゝものなり、故に通常、略式を用うるを可とす、略式とはいへ、首尾は必備ふべきこと、是レまたはじめにいへる如し、是は最も注意すべきことゝなる故、わづらはしきまでいへり、

又花見に誘ふ文、野遊に誘ふ文、納涼に誘ふ文などの類は、凡これに準へて知るべし、

一筆申上候、きのふけふの人傳よきゝ侍れば、某の梅園、一ひら二ひらは、

さきそめ候よし、吹く風も肌寒くは侍れど、氷のひまより、うち出づる波の心地もし侍らん、萬の花にさきかけたる梅の心もと、明日の日曜を思ひたち申候、御さはりもおはさずは、御妹何々樣をも、御つれたち遊ばされ、何時頃迄に、御打ちたち下されたく候、あら〳〵かしこ、

（追てこの作例のかきぶりをものして、一覽に供すべければ、以下双方の名宛を省く）

仝返事

かをりゆかしき御文、うれしく拜見いたし候、明日の日曜には、何事かせましと思ひ案じ居候折柄、めづらかにも、梅見の御思ひたち、いかでか御心にそむきまつるべき、例刻までには、妹うちつれ、御館おどろかしまつらん、よろづはみともの途すがら、聞えあげ侍らん、あら〳〵かしこ、

花見に人を招く文

花見をはじめ、人々を招きて、何の催し、くれの會などある文は、おほよそ、これ等に準へて知るべし、

一筆申上候、このころの四方のけしき、白雲のかゝらぬ峯もなきに、春のひかりは、草のいほりにもあまねく、池の堤の櫻、きのふけふ、さきものこらずさきいで申候、上野、隅田のいづくはあれど、塵にそまぬを、一しほの興に、今日しも、心しりの友どちうちよりて、花を見るといふを題に歌文のむしろ相開きたく候、夜の間の嵐も心にかゝり候間、是非とも今日のほどに御いで下されたく、くれぐれも願上候、あらあらかしこ、

(以下大方は、返事文を略せり、見ん人、前の二例に準へて、大方を推してよ。)

女服考（第十一稿）

有住齊

前述に、裋と云ふものを、いさゝか演べたれども、いまだ裲襠と袿襠の事に及ばず、今回に是を云ふべし、

明衡消息に、請舞姫童女装束事云々、裲襠新可調歟、二女不知案内、可給本様也とあり、又美麗童女、定難尋得歟、裲襠在誰許哉、（是五節の舞妓の事を云ふ也）

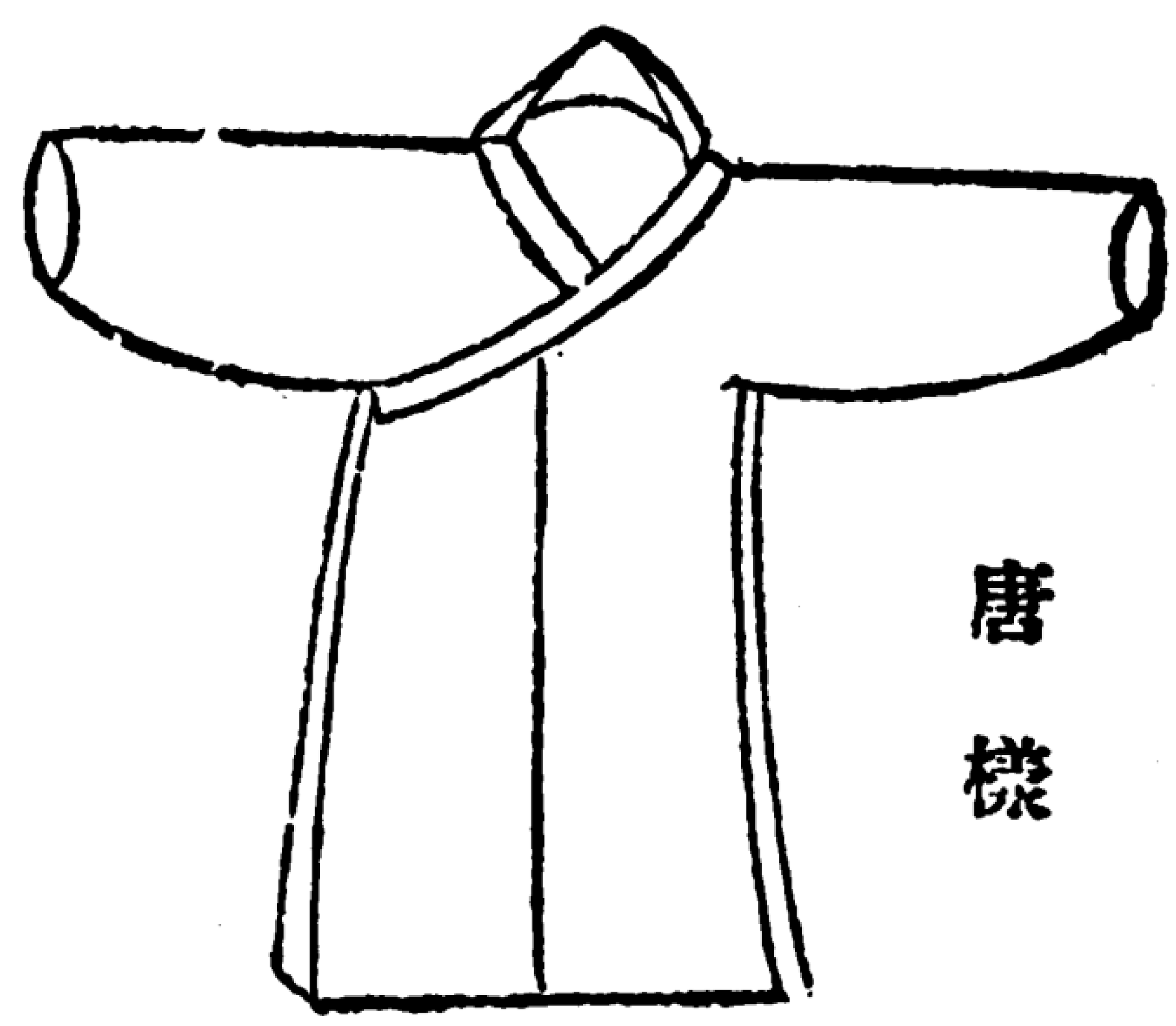
和名類聚抄衣服類四十五裲襠衣名也、釋名云、両襠字知加介唐令云、慶善樂舞四人、碧綾袿襠、箋註云、新唐書車服志、皆裲襠袿襠並載、通雅亦云、袿襠言裲襠之蓋其外也、則知非一物、源君混同、恐非是、

此裲襠は、漢籍にも女の着たる事みえて、捜神記六に、好婦人云々、丹繡裲襠とあれども其体みえたる物なし、

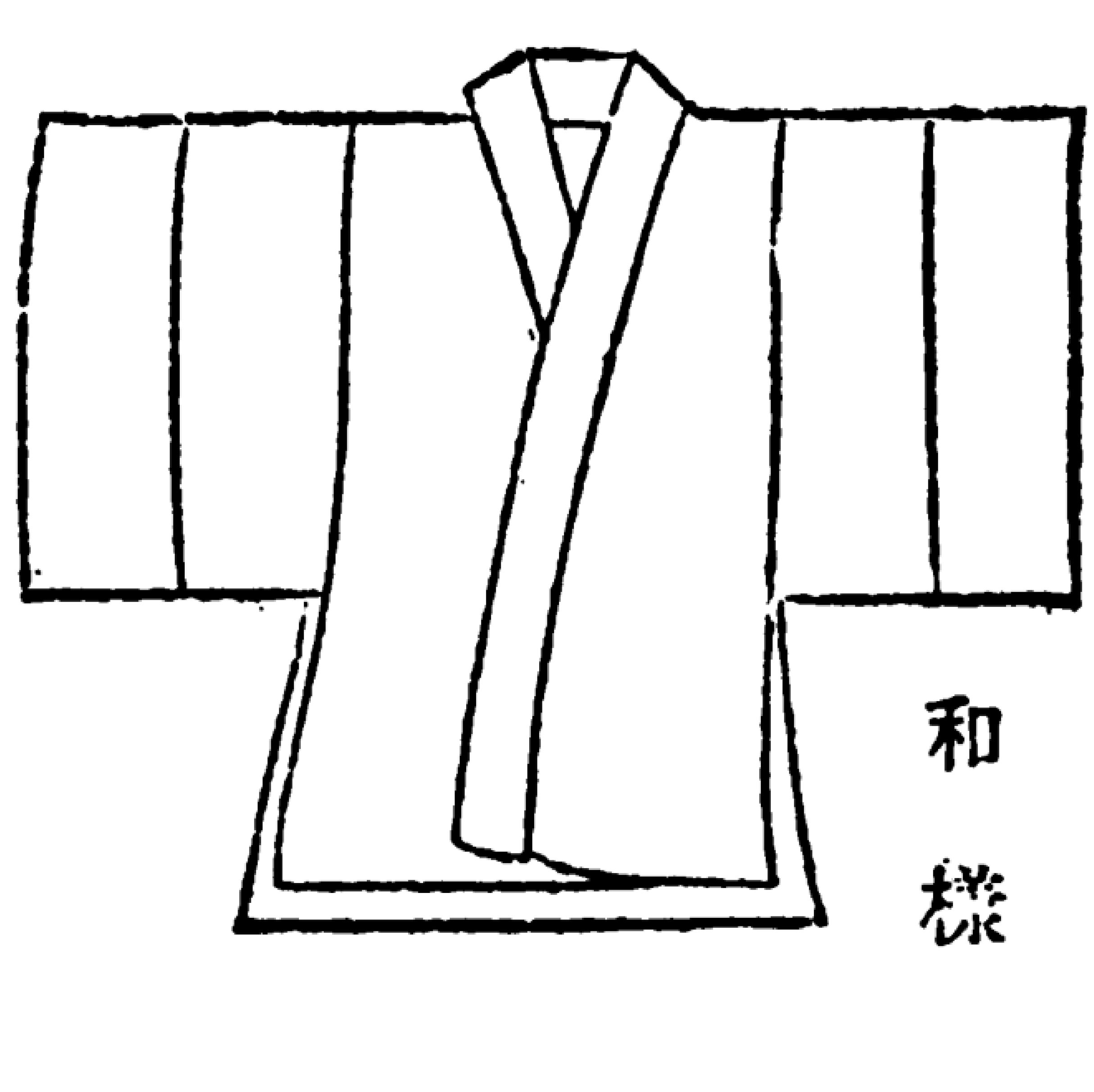
又舞人のきる裲襠も、令義解に武官の禮服繡裲襠とあるものは、漢製のものにて、一片當胸、一片當背より、両當の名あれど、女のきるものには、似たるものもあらず、

和訓栞に、倭名抄に裲襠をよめり、唐の鹵簿令にみゆ、前と後とに、あつる袖なしの服ゆゑ、打掛と云ふ也ともあり、

和漢三才圖會二十八、汗衫（中單、和名加佐美、汗襦、和名宇知加介、）用布六尺、裁足覆胸背、前當胸、後當背、故曰裲襠、倭名抄汗衫裲襠以爲二物、未詳何是非、今賤民夏月用汗衫、有袖無袖、任意、可以避汗、而晴不可用、



唐樣



和樣

齊云、汗衫、裲襠二物なり、一物となしたるは、三才圖會の誤りあるべし、又次將の着る裲襠と、女の着る裲襠とも、一物ならず、名は同じくして、其製大に違へるなり、女の着るは、うちかけと云ふによりて、裲襠の二字を、かりに用ゐたる也、しかれバ裲襠の字のかた、少しはあたれるものなるべし、古製は肩衣袖なし羽織の如く、下の方ははなれて、肩より打ちかけて着て、其上より帶もてしむる故、打かけの名ありと、筆の御靈にみえたる如くありしを、後世は帶もせず、上にはふり着て、引たるが故に、うちきと同じものゝ、すがたにはなりたるが、裲

袿には身分の貴きもの、着るべき製あるによりて、名をもかいどりと稱し、又うちかけとも名づけて、遊女などの裝とはなりぬらんと、想像らるゝ也、

又云、打かけと云ふ服はもと、袿の製にて、打かけ着るよしの稱なれども、鎌倉の代にも、貴女の褻服に定められて、東鑑に御息所御服、月充注文にみえたり、（其文は前陳にあり）足利の代に、腰卷と云ひしも同じ、德川氏にいたりて、搔取と名は替へたれど、其製は全く同じ、諸侯の奥にも、專ら用ゐしなり、

女房故實（奥書に、細川幽齋の所持本を寫しあり、）六月一日、すゝしうらのこしまき、御なりの時とものやうだい、大上らう御ふたりばかり、御參候、ゑぬひ物をめして、おり物を御かいどりに御さた候、御かいどりの上に、むねのまはりを御かけ候、うすおの御扇を御持候、

武家女房裝束（此書作者不分明、按に元祿頃の物ならんか、）婚禮の裝束の事、上臈御裝束は、四季にしたがひて、小袖、或は袷をめす、冬の節なれど、間に白あやをめし、御かいどりは、幸菱にて、ねもしの御かつぎ也、夏の六月、秋七八月頃にても、下に袷、或は單にてもめす、上は幸菱の袷をめし、幸菱の白さげ帶し給ふ、（中略）御色直しには、黑紅梅を着給ふ、是

は祝の色なれば也、糸やうのつけ帯にも、御腰巻も黒紅梅に、若松雛鶴、或は宝尽の類の織物あり、其夜の御下着を、ねずりの衣と云ふ、

又云、本式の装束の事、中略 武家の女中の小袖の製は、上下のわかちなく、皆一様也、せめては上つかたに、本式の装束し給ひてこそ、賤の品もわかれ、御作法とも申すべけれ、故實の書に、昔上臈上つかたの御出立、本式は其品多かれど、大方まづ御下は、練にて、次に織物、染入縫物、はくだみの類などめし、上にはから織をめされしとぞ、記し侍りぬ、今は其人も常の人も、白赤の下重に、地黒のうちぎを本式とすれば、此禮にてもわかれず、只上つ方には、時をりふしの規式の装束なさるゝによりてこそ、貴き所を仰ぐなれ、

又云、式装の略、十月衣服の色、三重なる頃より、三月二日までのうちに、晴がましき所、祝の座には、地紅の間着に、地黒のうちかけして、更に誤りにならずとなん、中略 いか斗貧くても、無地の白小袖の上着を、けんぼう地黒の間着は、必せぬ作法也、下略

大三問答 上問大脇重庸、答大和守景文 三 婦人衣体の事、凡之義奉伺候、答 八朔より表白は白袷に候、又模様の袷も着用候、九月節句までは、袷に候へ共、袷の掻取は、不可成、依

て品により、グルリ綿と稱し、白袷の着付に、模樣袷の搔取も致し候、又云、京中女房衣服、四季替如何御座候哉、答、宗五記云、衣裝の替り候時節の事、三月中は袷に薄小袖、四月より五月四日迄袷、五日より男衆は帷子、女中衆は殿中には、すずし裏のねりぎぬを召候、御腰卷もすゞし裏、六月一日より、七月中かたびら、八月一日より又練ぎねをめし、御腰卷、男衆も、古は八月一日より袷を召したるとにて候、今は九月一日より、袷を着、九日より小袖を着候、

女中常服畧記（文化三年印本）正月上着、地黒、地赤、地白、綸子、模樣定まりなし、二月三月仝じ、四月地黒、地赤、地白の袷、五月四日まで同じ、五日より單物、六月地黒、地赤、地白の帷子、七夕白帷子、帶腰卷、同前、八朔地白、綸子、單白帷子を用う、帶腰卷同前、九月八日まで、四月に同じ、重陽より以下三月に同じ、右上着とは、搔取を云ひたるなり、

漫錄

桂園翁の直話(承前)

御歌所　大口多比之

世に兒子もる親の、いとをさなきまで、よろづにまことあるを見給ひてなむ、ものにしたしむこゝろのそこを、おぼしわきまへたまへ、かけまくもかしこく、およばぬわざながら、佛菩薩のあまねきいつくしみの波、三世にあふれて、ながく衆生を、めぐませたまふがごときを、おもふべし、よくこれを勘味して、露ばかり、こゝろにしめば、道を得むことも、またかたからじ、かくいふ景樹など、むげに、わかゝりしむかし、何事にも、こゝろいとはげしうするばかりなりしを、この歌まなびにつけて、さま〴〵に、おもひのどめ、おこなひものしきつるに、とりわけ三十あまりのころより、老の今に至れるまで、猶かく、しきしまのやまとしまねにたどり、玉ぼこの道の行手に、さまよふまに〳〵、よろづはげ〳〵しう、ものわすれしつるに似たりといへども、はるけき難波津の、よしやあしやをとひ、安積山の、かげきよき山の井の心をくみ、且つたかづらの、しげくむすぼゝれたるくま〴〵、すべての大かたは、さぐりきはめざるものあることなし、みづから、よくつとめおこなひて、まなびずばあるべからず、それ春のあした、花にむかひて、霞をあはれみ、秋のよの月のかげに、こぼるゝつゆをはかなみ、はた人のたのしきをきゝて、ともによろこび、かなしきをみて、うれふるのみ、人情といはむや、さは山に入りて、みねのたかきをおもひ、海にいでゝ、そ

なかして、ゆるかせに、きゝすぐしたまふことなかれとて、ねもごろに、しめしのたまはする、いとかしこう、かたじけなく、たゞわきくる涙に、そでもひぢ、打しをれて、しづみをる程に、やうやう鳥の八聲、そこはかとつげて、あけゆかむずるそらぞ、猶いと口をしう、ねたかりし、かゝりける事の、二夜三夜も侍りしは、よに、またなきたまものにて、この道まなびはもとより、うつし世のかぎり、何さまにわたるとも、大人の、このみいましめをだに、わすれずぞ、などおもひしみてけれど、そのはし〴〵、わづかにしるしとゞめたるは、いとも、はづかしきわざになむ、

女誡和解　(承前)

このふかきをはかるに似て、薪こる賤のを、すなどりする蜑といふとも、さばかりをだに、しらざるものなからむやは、天然自然のまゝ心は、則人の本性にして、ひろく大いなる事、わたらぬくまなく、深く遠き事、およばぬかぎりなし、しかも感ずるにいたりては、いとこまやかなるものから、又つねに空虚にして、其あるところ、きはまらざれど、とみに、これをうることかたきあり、さるは、よく人智をはなれ、名利をすてゝ、よろづ日用に、こゝろをつくし、あらゆるものゝ感哀を得ざれど、このまごゝろといふものを、みづから、我がものになさんこと、生涯あるべからず、さて今こゝに、説きつくしがたけれど、よくこゝろをめぐらし、ものによりて、自得したまへかし、あ

敬愼第三

内藤 燦聚 寄送

敬はうやまひ、愼はつゝしむにて、人をうやまひ、己をつゝしみ、自ら守ることを重んじ誡しむ、よりて章の名とするなり、

陰陽性を殊にし、男女行を異にす、陽は剛をもつて德と爲し、陰は柔を以て用とす、男は彊を以て貴しとし、女は弱を以て美とす、

陰陽性を殊にしとは、性はうまれつきなり、陰と陽とは、火と水にして、其性質おなじからざるなり、男女行を異にすとは、此と彼とちがふなり、陰陽のうまれつき違へは、男女のおけくれなすところの行も違へりと、陰陽の理をいつて、男女の道をわかすなり、陽は剛を以て德となすとは、剛とはつよくこはきなり、陽の陽たるは、つよくはげしきを、もちまへの勝れたる德といふなり、陰は柔を以て用とすとは、柔はよわく和あるなり、陰の陰たるは、よわくやはらかきを以て、持前の勝れたる用とするなり、用とはわざにて、其のはたらきをいふなり、男は彊を以て貴とすとは、前に陰陽の陰陽たることを述て、こゝは男女をなぞらへ云なり、彊もつよきなり、つよきを以て貴とすとは、前にいふ如く、男子は陽にして、其の貴むべきは彊なり、女は弱を以て美とすとは、弱は第一章にいふ卑弱の弱にて、よわくたをやかにやはらかなるなり、女子は陰にして、よわくたをやかに和らかなるを、陰のもちまへのよき所とす

るが故に、美しとするなり、徳といひ、用といひ、貴といひ、美といひ、陰陽の道理をならべとき、言葉を對にして、さとしあかすなり、故に鄙諺にいへることあり、男を生は、狼の如くなれども、猶其の尩ならむことを恐る、女を生は、鼠の如くなれども、猶其虎ならむことを恐る、しからむ則身を修ることは敬にしくことなし、彊を避ることは順にしくことなし、故に曰く、敬順の道は婦人の大禮なり、夫れ敬は佗にあらず、持久の謂なり、夫れ順は他にあらず、寛裕の謂なり、持久は止足を知るなり、寛裕は恭下を尙ぶなり、鄙諺とは、今の世にも、常々の言葉にたとへのある如く、其の時のいやしき人々の、いひならはす言葉を引て、さとすなり、男を生は、狼

の如くなれども、猶其尩ならんことを恐るとは、尩は尩羸の疾とて、やせ衰へたるをいふ、このころは、男子を生は、いかにも剛彊なること狼の如くなれども、猶其上にも尩羸のやまひある人の如く、其の生立のかよわならんことを恐るとあり、恐るはきらひいむ言葉なり、是れ男子は、強きがうへにも、猶つよきことを願ふなり、女を生は、鼠の如くなれども、猶其の虎ならんことを恐るとは、女子はいかにも柔弱に、もの和なる、を尊とすれども、もとより鼠の如くなれども、猶其の生立虎の猛きが如くなるにいたらんことを恐るゝとあり、是れ女子は、弱がうへにも、猶よわきことを願ふなり、此の二句鄙諺なれども、道に合ひて、しかも其時の人の常にいふことにて、

耳ちかくさとしやすき言葉をひきもちゐて、いましむるなり、

(原注)按ずるに、此のことわざの句、狼尪と鼠虎と、韵にはかなひたれども、鼠虎の對よりみれど、尪の一字不類の如く覺ゆ、後漢書には尪字の註なし、今王相が注に從て、其の解を下すといへども、義未だ穩當ならず、偶通鑑を閲するに、唐の太宗紀に、諺に曰く、狼を生て、猶羊の如くならんとを恐る、といふ語あり、胡三省が注に、女誡の此の四句を引て、尪を羊につくる、韵もかなひ、義も亦大にまされり、しかれども後漢書數本皆尪につくるときは、みだりに本文を改めがたし、胡三省が引くところの女誡、別に見る所あるにや、猶考ふべし、

しからど身を修る事は敬にしくことなしとは、然らどとは、前をうけて、まへに云ふごとくの事なれど、といふ意にて、又後を起す言葉なり、身はわが身のことをさして云ふなり、敬にしくことなしとは、敬は人をうやまひ、心かたちを愼むなり、しくことなしとは、敬の外に道なく、敬に及ぶ事なしといふ心なり、彊はつよきなり、彊と彊とあらぶれど、必爭となる故に、彊にあらそはず、のがれさくるなり、其のがれさくるは、順にしくことなしとあり、順はあらそはずしたがふなり、己を人より後にして、先たゝざるをいふ、故に曰く、敬順の道は婦人の大禮なりとは、敬順の道は、前にいふ所の、身

を治むるの敬と、驕をさくるの順を合せていふなり、禮は禮義禮讓にて、婦人の禮義敬順の道なりと、誡むるなり、夫れ敬は它にあらず、持久の謂なりとは、夫は端を改めて言葉を起し、敬順を、ふたゝびくはし さとすあり、敬は它にあらずとは、敬といふは外のことにあらずとなり、持久の謂なりとは、持はたもつなり、手にものをしかともちたる如くなるをいふ、久はひさしきにて、つくることなく、やむことなきをいふ、敬は人のみきく間のみにて、かぎりあるものにあらず、終身たもつをいふ、夫れ順は它にあらず、寛裕の謂なりとは、寛はゆるやか、裕はゆたかなり、すべてものに爭はずさからはざるなり、持久は止足を知るとは、止はとゞまりうごかざるなり、足はたることなり、足る事を知りて、其所にとゞまり居るなり、寛裕は恭下を尙ぶとは、恭はうやうやしくつゝしむなり、下は人にくだり、己を後にするなり、寛裕の道は、是れ恭下をたつとび行ふとあり、此段敬順の道を深切にくりかへしときいましむるなり、

夫婦の好は、身を終るまで離れず、房室に周旋して、遂に媟黷を生ず、媟黷既に生ずれば、語言過まつ、語言既に過てば、縱恣必作る、縱恣既に作る時は、夫を侮るの心生ず、これ止足を知らざるによれるなり、

夫婦の好は身を終るまで離れずとは、夫婦の際、夫は婦を治め隨へ、婦は夫に從ひ仕へ、互にしたしみしたしむをいふ、身を終るまで離れずと

此、生死を同じくするなり、房室に周旋し、遂に媟黷を生ずとは、房はねや、室は居間なり、周旋は行かよふことなり、媟はなれるなり、黷はけがるゝなり、夫婦は朝夕その居所は同じくして、情愛ともに深ければ、遂にその深きになるるにすぎて、けがるゝことを生ずるなり、媟黷既に生ずれば、語言過つとは、語はかたるなり、言はものいふ事なり、あやまつとは、言葉の行違ひよりして、爭ふことあるなり、語言既に過てば、縦恣かならず作るとは、縦はわがまゝ、恣はほしいまゝなり、語言のあやまちよりして、わがまゝなる心も出來るなり、縦恣既に作る時は、夫を侮るの心生ずとは、わがまゝなる心よりして、夫を侮りかろんじ、ないがしろにする心生ずるなり」これ止足を知らざるによれるものなりとは、止足は前にいふ、持久は止足をしれり、といふ是なり」

夫れ事に曲直あり、言に是非あり、直なるものは爭はざることあたはず、曲なるものは訟へざることあたはず、訟爭すでに施す時は、忿怒のことあり、此れ恭下を尙ばざるによれるものなり、事に曲直あり、言に是非ありとは、言行を並べいへるなり、事とは行にて、今日のなすわざなり、曲直とは曲はまがれるなり、直はすぐなるなり、是非とは是はよきなり、非はあしきなり、直に對して是といひ、曲に對して非といへるなり、直なるものは爭はざることあたはず、曲なるものは訟へざることあたはずとは、

爭訟の因て起る所を解き誡むるなり、それ事は大となく小となく、すべて直と曲とは、情意乖いて和同せず、直なる者は、曲れるものを爭ひためたゞすに至る、曲れるものは、直なる塗に訟へわびて、非を理にしひていひなさんとす、しかるときは、爭訟やむことなく、一家治らざるに至るとなり、訟爭既に施すときは、忿怒のことありとは、忿怒はいかりいかるなり、施はひきおよぼすなり、前にいふ如く、爭訟常に絶ざれば、必ひきおよぼして、あひともに忿り怒るに至るをいふなり、此れ恭下を尙ばざるによれるものなりとは、恭下を尙ばざれば、爭訟忿怒の因て來ることかくの如しと、深くいましむるなり、

(原注)按ずるに、この章本文、上に事に曲直あり、言に是非ありといひて、其下曲直の解はあれども、是非の解なし、諸本を參校するに、みなかくの如し、按ふに曲直の解にて、是非の義をふくみたるにや、しかれども事と言の誡をならべ解きて、其事の解のみをつくして、言の解をつまびらかにせず、また一書の體裁丁寧に告誡して、たゞ其解のそなはらざるものは、脫文あるにや、下曲從の章にもまたかくの如き文あり、姑く其の疑をこゝに辨ず、

夫を侮り節ならざれば、譴呵これに從ふ、忿怒止まざれば、楚撻これにしたがふ、夫れ夫婦たるものは、義は和を以て親み、恩は好を以て合ふ、楚

撻すでに行はるれど、何の義かこれ存せん、譴呵すでに宣れど、何の恩かこれあらん、恩義ともに廢すれど、夫婦離るゝなり、

夫を侮り節ならざれど、譴呵これにしたがふとは、侮はかろんずるなり、節はみさをなり、譴呵とはせめさいなみいかるなり、夫にはわがみさをを守りしたがひ仕ふべきを、反て夫を侮り輕んじ、女子たるのみさをを失へど、せめさいなむに及ぶなり、これにしたがふとは、それにつれて、此ことのしぜんにいでくるをいへるなり、忿怒止ざれど楚撻是にしたがふとは、楚はしもと、撻はうつにて、ちやうちやくするをいふ、いかる事常々やまざれど、夫よりしてちやうちやくするのかたましきにいたるをいへるなり、夫れ夫婦たるものは、義は和を以て親み、恩は好を以て合ふとは、義は義理禮義なり、和はやはらぐなり、親はむつましきなり、夫婦の際の義理禮義は、やはらかなるところよりして、したしみむつましきに至るなり、恩はいつくしみめぐむなり、好はよみするなり、夫婦の際のいつくしみあはれむことは、常々のよみししたしむよりして合ふなり、合ふとは、二つのものゝあはせて、一つとなるの意にて、夫と婦とわれ／＼にならず、一つの如きをいふ、楚撻すでに行はるれど、何の義かこれ存せんとは、存は在るなり、こゝは前をうけて、すでに楚撻のあら／＼しきに至れは、和を以てしたしむの義もあらじとなり、譴呵すでに宣れバ、何の恩

かこれあらんとは、これも喧嘩のかたましきに至れバ、好を以てあふのいつくしみなしとなり、恩義ともに廢すれバ、夫婦離るゝなりとは、廢はすたれやぶるゝなり、前にいふ如きの恩義、二つともにやぶれ、すたれて義の和を以て親しむも、恩の好を以て合ふも、みなすたれて、はとめにいふ、夫婦の終身離るべからざるも、こゝに於て離るゝなりと、誡むるなり、

（敬愼章了）

村田春海 歌がたり

松野操雄 寄送

何の歌語、くれの歌話と、樛の木のいやつぎ〳〵に、出でくめる今の世に、之はまた、吾がのにあらぬ古人のあれど、取りいでゝ掲げんも、いさゝか嗚呼なれど、この歌がたりよ。縣居翁の門人にて、文かくわざに、さしもたくみなりきといふ村田春海ぬしのものせるにて、讀みもて行くに、愛でたきふしの多かめれど、これよりつぎ〳〵かゝぐることゝなしぬ

歌がりたり　平春海

歌のさまのよしあしをさだむるは、海山のけしきの、人によりて、こゝろの引かたことなるが如し、そは見る人のこゝろの高きと、ひくきとによりてしもことなる。萬葉集にのりたる藤原、奈良の頃のひと〳〵の、すぐれたる歌どもは、富士のねの雲にそびえてたかく、熊野の海の底ひもしらずふかきが、見るもかしこく、のぞむもあやしきが如

し。古今集のころなる歌は、須磨、明石のゆほびかなる海づら、嵐山、小倉の峯の花もみぢの、をりにあひて、めもあやなるが如し。古今集よりくだりては、氣しきは、やゝおとりぬれど、猶おのづからある海山なり。かくて題詠の歌、もはらとなりてよりは、おのづからなる、まことの氣しきはうせて、みな人の心もて、つくりなせる庭の如し。かの心高き人は、富士の根、熊野の海、須磨、明石、あらし、小倉の、おのづからなる氣しきをめづれど、心おくれたるきはの人は、かのたくみに、つくりなせらむ中島の有さま、やり水の心ばへ、岩木のたゝずまひなどの、世ににず、をかしきにのみ、めくれて、かへりては、そをおのづからなる海山にも、まされりとぞ思ふなる。そはおのがじゝの、心の引かたなりともいひて、やみぬべけれど、萬の道、こゝろ高きかたを求むるこそ、まことのすぢなれ。さるを歌のみは、高きかたもとむる人のまれなるは、口惜しき業ならずや。手かくみち、繪のたくみは、さらにもいはじ。萬のはかなきわざすら、物の上手は、其すぢにつけては、いと高きこゝろばへあるものにて、めのまへに、さる類のおほかるを、世のうたびとの、おもひくらべて、はぢざるこそ心ゑね。このくだれる世にして、いにしへの歌の、こゝろ高くすぐれたるよしを、よく考へさだめたるは、わが縣居の翁ぞ、はじめなりける。かの荷田の東萬呂の大人より、いにしへの學の道はよく、その山口をひらきたれど、歌の事は、さだかにあげつらへることも

なかりき。また在満ぬしが、八論とかいふは、あらたに考へられたる事も見ゆれど、新古今のころなるを、歌のみさかりなりとあるは、猶ふかくもたどらぬわざになむ。また難波の契沖法師は、世にすぐれたる才ありける人にて、古の歌をとき得る事の正しきすぢは、この人をこそ、はじめとはすめれど、歌よむことのうへまでは、こゝろおよばずやありけむ。今漫吟集の歌どもをみるに、こまかにたくみなる歌はみゆれど、いにしへの、高くのどかなるすがたを、まねびいでたりとおぼゆるふしは見えず。すべてこの法師の歌にしては、猶ふさはしからぬやうにぞ、おぼゆるかし。かにかくに、いにしへの、高き手ぶりをしのぶひとは、わが縣居の翁がをしへに、よらでやはあらむ。

おほよそ歌は、題詠もはらとなりてより、あらぬさまにぞ、なりもてきにける。いにしへのひとの、事にあひ時にふれて、こゝろよりよみいでたる歌は、野山にさき出たる花の、かすみにほひ、露にうるほへるが如し。後の世人の題をまうけて、こまやかによみいでたる歌は、めづらかなるつくり花に、うるはしきにほひを、しひてうつせるが如し。そはいにしへの歌は、おのづからなるこゝろのまことよりいで、後のうたは、あらぬことを、あながちに、もとめいでたるそらごとなれば也。いにしへの歌は、あるがまゝをいひいでゝ、そをなくはかなきが如くにして、こゝろふかし。のちのうたは、ひとのおもひよせぬふしを、もとめいでて、さかしく、くまなきがごとくなれど、こゝろ

あさし。またいにしへの歌にも、たくみなるあり。されど、のちのたくみなるとは、いとことなり。いにしへのたくみなるは、こまやかに、あやなしたるも、まことをうしなはず。後のたくみなるは、ひとわたりうちみて、げにとおぼゆるふしあるも、よくあぢはふれど、まことある事すくなし。いにしへの人は、こゝろをのべむとて、ことばをとゝのへ、のちの人は、ことばを先つくりて、それがために、こゝろをもとむ。いにしへのひとの、詞をかざれるは、ことばつよく、うるはしくして、しなたかし。のちのひとの、言葉をかざれるは、ことぞよわく、えむになまめきて、さまいやしげなり。すべてこのけぢめを、よくたどらぬひとは、いにしへの歌の、すぐれたるところの、後の世の人の、得もおよびがたきよしをぞ、おもひしる事かたかりなむ。いにしへのうたは、こゝろ高し。みむ人のこゝろ、たかゝらずしては、その高きよしをば、ゑおもひつくまじきわざなり。されど世に、いにしへをよくしりて、いにしへをこのめる人こそ、すくなけれ。後のうたは、たくめる有さま、あらはなり。こはそのおもしろきふしの、たれもみて、わかちぬべきものなれど、しりやすきまゝに、ひとのこゝろ、のちのたくみあるにのみ、よることぞうべなれ。すべて世の歌人の、新古今のころのうたをのみ、よしとおもへるひとのおはきは、この故なり。そはものゝいだりふかゝらぬ、まだしきがはどの、こゝろぐせとやいふべからむ。

手鞠歌（二）　あ、ま

源成勝作

成勝は、今より七八十年以前の、江戸の歌人なり。これは世に行はるゝ鞠歌の、心も詞も、むげに賤しきをなげきて、新に作りて、家の子どもにあたへしものなり。

一つとや。一夜のほどに春きぬと〳〵
竹にうぐひすはやつげつ〳〵

二つとや。吹くものどけき春風に〳〵
池の氷もとけそめぬ〳〵

三つとや。耳にも目にも此御代は〳〵
心のいさまぬことぞなき〳〵

四つとや。夜のまの雨にうめのはな〳〵
ほころびそむる嬉しさよ〳〵

五つとや。いつかとまちし梅柳〳〵
手折てかざゝむ時はきぬ〳〵

六つとや。紫ふかきふぢのはな〳〵
それよりまさるは櫻花〳〵

七つとや。何もおもはず春はたゞ〳〵
花に心のあこがるゝ〳〵

八つとや。八重にひとへに白濃ぞめ〳〵
いづれもめでたき花なれや〳〵

九つとや。越路にかへると聞く雁も〳〵
花のさかりを見すつなよ〳〵

十とや。留てもとまらぬものなれど〳〵
猶しもとめたき春なれや〳〵

三井家婚禮式（つゞき）

長屋基彦

第三色直式 是は祝盃畢はりたれバ、常食に至る式也、本來三日めにあるべき也、
出座の順序如前條、
一長熨斗鮑出之、中央 如前條、
一色餅出之、契子餅と稱す 双方に据、
一全撤之、
一本膳出之、
一二膳出之、
一三膳出之、
一向詰出之、
此時介副女中相進み、蓋取之、膳の下脇に置、
一食鉢出、蓋受出、
容体見斗、直に引、
一本汁再進出、

一向詰引之、
一置盃出之、
銚子、提子出、婿より一獻宛盛之、直に勝手に入、
一吸物出之、星物と云 三膳を引直す、
銚子、提子出、前に同じ、
一中皿肴出之、吸物膳に付込、
銚子、提子出、前に同じ、
一置杯撤之、
一濁杯出之、
一嶋臺出之、婿の前、
一押臺出之、嶋臺に並置、
銚子、提子出、先下座に扣居、容体見斗、銚子婿の前に進出、二獻盛之、嶋臺、銚子持添、嫁の前に持參、一獻盛之、加に立、此時婿方の老

女起座、押臺持立、嫁に挾肴進之、復座、
銚子、嫁の前に進之、二獻盛之、嶋臺、銚子持添、婿の前に持參、一獻盛之、加に立、
此時嫁の介添老女起座、押臺を持立、婿の前に進出、婿に挾肴有之、復座、
銚子婿の前に進出、二獻盛之、納盃、
銚子、提子、大結の業有之、勝手に入、
是を五獻三獻の盃と稱す、

一押臺引之、
一嶋臺引之、
一滴杯引之、
一吸物引之、
一二膳引之、
一菓子出之、十二組
本膳を引直す、
一茶出之、
一茶碗引之、
一菓子引之、
待上臈一進、千秋萬歳目出度由申之、
一同會釋有之、畢て待上臈、媒介婦人、婿嫁と順序して、老女先導、休憩の間に入、

第四舅對面　婿方近親對面等、追々有之、畧式行之、

萬端家來目見迄相濟たるは、夜入時也、午後第二時より、惣て座作進退、襖障子開閉に至る迄注意し、物音更に無之、水を打たる如し、まして式中の景況は、給仕の女中の白裾の、疊を磨る音、小雨のふるに異ならず、さら〳〵ときこ

ねし計りあり、
第五　十七日　三つ目哲子餅爲取交、同日里披、
婿入式如法相濟、
第六　十九日　嫁方舅、及常主夫婦入來あり、一
層厳重の式作法、無滯濟みたり、

第七　廿一日　双方の近親、於芝紅葉館面接
の饗應あり、
第八　廿四日　銀行の役吏、於同所饗應あり、
（畢）

畫師の妻

江見水蔭

其二

其時母樣は恐ろしく眞面目になりて、　文ちゃんそんな事言ふ物ではありませんよ、例令御友達が何と言ッても御父樣の事を彼此申すものではありませんよト諭すに、娘は倘これに伏せずして、　でも御友達が皆さう言ッてよ……妾知らないから母樣に今おたづねしたの。　それは御友達は何と言ふか知らないけども、家の御父樣は決して御下手ではない、それは世間では何とか彼とか惡口を言ふであらうが、如何して／＼、家の御父樣は何處へ出ても耻かしくない立派な畫師

で居らつしやるよ。　　さう、では之から惡口言ッたら、さうではない、御父樣は御上手だつて妾敎へて遣りませう。　　いゝゑ、辨解するのではありません、言ふ人には言はしておきなさい、家の御父樣は世間に媚る事が御嫌ひだから、御畫きなさる畫がどの畫も〳〵眼の低い人達にはまづく見ゑるので、其人達に何程惡く言はれても少しも口惜しい事はない、只眞實に御父樣の技倆を知ッてる御方に賞めて頂けたら、それで澤山だよ。　　御父樣の技倆、知ッてる御方ありますか、ト娘は尋ねたり。　これが返辭には母親躊躇なしぬ。少時して溜息と共に漸く、それは無からうよト言ひぬ。　此時は筆持ちたりし手のいつしかに帶の間に差込まれて、首を低れたり。　娘は炭團の灰を拂ひつ、　　さう、一人もないのト言ふ聲力なし。無い證據には去年の春であッたか、競進會にお出しなすッた畫は大層好く出來たのに銅の賞牌でさへ取れないのだもの。　何新聞であッたか、大變に惡く評してあッたさうだよ。だか、いつも御話に入らッしやる水田の叔々さんねえ——時人の。彼方ハ好く見て、好く評して被下ので、御父樣が喜んで、おいでなさるよ、だから眞の技倆を、知ッて居らッしやるのは、まア〳〵彼方一人——勿論賞めはなさらないけれど





も…………水田さんも御不仕合、丁度御父樣と同じ樣に…………なぜかう世の中は逆に廻るだらうか、妾には如何も分らないく\ト言ひて又筆を取りぬ。されども塗る方には心向かず、これも良人が注文を受けて畫きたる肖像の似て居らずとて先方より突返され、今は其紀念の額となりて壁上に懸るを見ながら。　それにしても早く歸つて來て被下らなければ、母樣は困ッて仕舞よ。御相談申す事は山の樣に積ッて居るし、落合だの、小橋だの、それに大和田さんなンぞからの催促も度々來るのに、如何したら好いか、妾一人で誠に遣切れないよ。　なぜ歸ッていらッしやらないのねえ、妾だの母樣を御忘れなすッたのかねえ。　御忘れなすッたのかも知れないよ、父樣の事だから…………此樣に永い事旅にいらッしやるのは、少しは好い事でもあるのか知ら、少しは好い事でもあるのであらう、但し思はしくなくッてか今度こそは如何かして、殘して御歸ッて被下ればよいにねえ。　御土產を持ッて御歸りなされバよいのねえ。　其御土產はアチにあるまいよ。　でも余所の御父樣は近い處からでも屹度持つて御歸りなさるのねえ。

此言葉は母親の急所をや貫きけむ。はらくと落つる淚は石版畫の繪具を散らして、

紅色うるみぬ。俄に持病のさしこみ來りて、苦しきを兩手にて押へ、噛しばる歯の音。娘は驚きて馳寄り、甲斐々々しく背を撫でぬ、痛きは腹なるを。母様、母様と呼ぶ聲早や震ひぬ。大丈夫、心配おしでない……大丈夫よ……それよりか御白湯を一杯酌むでおくれ、まだ丸薬があるはずだから、と言はれて、娘はうろ〱仕つ。火鉢の傍の土瓶取上げ、御白湯はぬるくッてよ。

◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦

今病伏さバ此娘を如何にせむと、堪へ耐へし甲斐ありて、少しくやはらぎぬ。言ふまでもなく娘の介抱は薬よりもまさりたり。尚此上の好き薬は表の戸の開く音して。今歸ッたよ、お光、お文と言ふ聲なり。

文林

浦邊霞

近衛　忠煕

網引するあまの聲のみきこえけり
うな面とはくかすみわたりて

わたつみのあら磯崎のなみの上に
立つものとけきあさかすみ哉

毛利　元徳

鍋島　直大

はる霞そこともしらず立ちこめて
　磯うつなみのおとのみぞする

東久世通禧

わたの原おきつ白なみたゝぬ日に
　いよ〳〵たつはかすみなりけり

佐々木高行

春がすみたなびきわたる朝なぎに
　おきてこぐ舟もゆたにみえけり

高崎　正風

はなれずのこゝちこそすれ梢のみ
　霞にのこるうらのまつはら

黒川　眞頼

ふかゝりし霞もうすくなりにけり

　沖つしほかせひまかたつらし

吉地　[illegible]

磯山のまつをはなれていづる日の
　ひかりに匂ふおぼろがすみかな

小出　粲

にはよしと蜑の子等はいではてゝ
　霞とざせるひそざきのまつ

坂　正臣

はるがすみ磯山かけてたちしより
　浪はたゝずもなりにけるかな

大口　鯛二

霞む日は沖にもなみのみえぬかな
　うみの底までのどけかるらん

岡部　譲

寒紅梅十五の下

きえはてしつゆの根ざはにいでゝ
枯れし尾花にふくあらしかな

巖上龜　上地　信光

さゞれ石のなれる巖をよろづ代の
住家となしてあそぶかめまろ

雪中管絃宮中一月御歌　藤井　行麿

貴人のむつのはなみかふねつゞみ
ゆたかにきこゆ雪のたかどの

松浦佐用姫　佐々　豊水

ひれふりしその面影をまつらがた
松もむかしのかぜむせぶなり

山雪　關　大久樂

たま簾まきてみしよの手すさみも
消えてさびしき峰のしらゆき

海邊霞　蜂須賀随子

浦風にあみのはなちるあさぼらけ
にほひをそへて立つかすみ哉

柳原　愛子

和田の原あさひ匂へるなみの上に
たなびきわたる春がすみかな

小池　道子

白波はかすみのそこにしづまりて
おきにみえゆくいさり火の影

松平　健子

海でしの安房のとほ山みえぬまで
かすみこめたるたけしばの浦

澤鶴　三輪田眞佐子

わしたづの澤邊によばふ聲までも

長閑かりけりきみが世のはる

安東　菊子

朝霞

唐ごろもまだ重ねつゝきさらぎの
あさ立ちそむる春がすみかな

女鑑第二十九號に、川冬月とて、月影も流れざりけり天の川みなかみしもゝ氷りはつらん　とありしは、わがのにあらず、若かりし折、何れの歌書にてか、見覺えあるこゝちせられて、かきつけたるなりけり、わが腰折は、澤冬月にて、劒澤といふ澤のかたはらにてよめる、

尾崎すう子

氷上もこほりはつらんつるぎざは
ひかりするどき冬の夜のつき

あたらしきとしのいはひてふこゝろを　尾崎すう子

立ちかへる年のあしたは、よろづにめでたき事のみぞおほかる。さしのぼる朝日の影さへ、今朝あたらしきこゝちせられて、若水むすび、をろがむ折しも、つゞみの音して、まんざい〳〵、といはふこゑのきこゆると、やがて、おのが家にもまね來て、なか〳〵もつて、まことにめでとうさふらふ、とうたひはやしても、いでゆくあとより、また一くみがかはり來て、千ざい萬ざい、お家も榮えてましますと、おなじ心を、

繰りかへし千年よろづよ末かけて
いはふつゞみは打ちも絶えせじ

うれしさのあまり

三輪田　眞佐子

こたびかしこくも、　皇后宮陛下よりわが、友愛なる松尾たせ子が、維新の際、　王事に盡力せられし功を、めでさせましくて、白絹を　恩賜し賜はせけるに、渡邊國武君の祝し賜ひて、御和歌賜ひける、

そのかみの心つくしのことの音の
　雲のうへにやさえわたりけん

たせ子、御返し奉らすとて、

いや高き雲井までとはおもひきや
　なすこと難きたわやめにして

と、申上讃ると聞こえければ、われもうれしさのあまり、

とも野なる草のたもとに　大君の
　めぐみの露のかゝるうれしさ

姫嶋日記第三（つゞき）

故　野村望東子

晦日のあけがたに、

幾筋かおきのありそをかたくくに
　あらはして引く春のあさしは

鶯の善くなづきたれば、

なれてぞといひしことさへ鶯の
　きゝしるばかり聲のけぢかさ

のきちかきえだわたりして鶯の
　うき住家とていとひけもなし

よひそのみの名をまよふる鶯に

わが聲やめてゆづりつるかな
濱荻のしたねなきてははまゝつの
たかねにうつるうぐひすの聲
今茲もうとからなくにいみじくも
したしかなしきうぐひすの聲
巣籠り音まで待つにも人は違ふように
時もかはらずきぬるうぐひす
日ごとに慰められて、巣くひぬるに、いかなりけん、よくも鳴かざりけれど、
したねのみけふはなくなる鶯も
こゝろのうかぬことや思はん
いさり火を、
舟どふね並ぶあはひのむらもなく
打ちむれてたく蜑のいざり火

よるひるど、見るものきくものに紛らはして過ぐせども、
われとわが心をいさめなぐさめつ
春めかせてもはるならぬはる
明けゆく頃より風おこりて、雷さへ轟き、雨はしのをつく計りなるに、心も小さく思へども、人かげだに見えず、
いかつちのなりどよろかす雨風に
さりあへずこしあまも音せず
あくる三日、霞みわたりて、いみじう春めかしきに、心もなごめり、
同じ海としれどあやなし汐かぜの
昨日のあらしけふののどけさ
燈火のかげ見ぬくらがりも、はじめ計りのいぶせ

さも、なき心ちして
中々にねやのくらさになれしより
こゝろのやみはさりげなる哉
蜑の女どもが、梅のさき初むるより、たび〳〵折
りもてくるに、桃のめでたきを、越せたれど、
折々にあまがもてくるはあのえに
重なるはるのひかずころしれ
はた、ことかたの處女がおこせたるに、
汝が心かけて折りこしもゝのはは
千枝八千えにもまさる嬉しさ
など、書いちらして取らすれど、嬉しがりて、斷
えずおこすころ、をかしけれ、かくと聞きて、か
た〳〵より、處女どもが折りくるに、竹のつゝを、
いくつも人に切らせて、さしたれど、花に埋もれ

たる心地したるに、うぐひすの打ちしきりて鳴く
が、いみじうあはれに、めづらしくて、
はなのねだち鶯の音の絶間なみ
春にわ富むとおもひなさむや
夕さりかた、はら〳〵と雨の音すれど、
鶯はねぐらにかへるゆふぐれに
ふりかはりくる雨のおとかな
雨ふりつゞきたるころ、
つく〳〵と詠のはてもなかりしに
そはうち濡しうぐひすのなく
けふは彼岸の中の日とて、あまどもが、あやしげ
なる團子やうのものども、とり〳〵に、おこせぬ
る志はうれしきを、やらんかたなく、いぶせげ
にて、入れぬべきものさへなし、

彼岸にいたらぬほどはとぢこもる
　人やもひとをへだてざりけり

七日ばかりになれど、猶雨やまず降りくらすに、鶯はかれず來てなくが、いみじうろうたく、あはれにかぎりなし、

　ことにいへむわさげにぞなる鶯の
　聲きくたびにおもふこゝろを

（をはり）

雜報

●歌詠むわざ　婦女の德は、必優美ならざるべからず、必高尙ならざるべからずとは、吾人のしむ〳〵本誌において述べし所なり。さて、この優美高尙の德を養はむには、女禮式といひ、茶の湯といひ、生花といひ、その方法は、誠に多かるべきも、そが中に、尤も第一として修めつべきは、歌詠むわざになむ。そも〳〵、歌は、我が國神代の昔より、やごとなきあたりも申すも更なり、つま木樵る賤の男より、しほくむ海人のをとめ等に至るまで、事にふれ、折につけつゝ、詠みいでぬはなかりけり。さるからに、國人の心行おのづから優美高尙にして、禮儀そなはり、風俗正しくて、人の國よりも、君子の國とさへ稱へられき。されば、今の世の人々も、祖

先の心を継ぎて、ますく〜この道を修め習ひ、古有の美風を失はざらむことをつとむべし。殊に婦女子たちは、身を修めつべき一の課業として、學ばざるべからざるなり。女禮式固より善し。茶の湯、生花も固より善けれど、此等は多く、外面よりその態を導くものあり。歌は心を主とすれバ、内よりこれを養ふなり。内外相俟ちて始めて、十分なる功をも奏すべけれど、内よりするものには、わけて心を用ゐざるべからず。あはれ世の女等。殊にこの女鑑讀み給はむ程の女等には、卒先してこの道を修め得、その徳を養ひ、その心を正しくして、天下の婦女子を風化し給はでやは。

●あらぬ望　を起こして、一生を害ふ女子ありとかや。如何にといへバ、假令ば、女子師範學校あり、高等女學校なり、卒業する時は、恰も龍の腮の玉にても取りたらむやうなる心になりもて行き、彼の人位にては、配するに足らず。この人位にては、偕に老ゆべからずとて、人の己をかにかくに云ひあなづるをも知らず、品えりみする内に、年月は人をまたず過ぎ去りて、遂に「花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに」と後悔するに至る。さては、良しき處もなくなりて、絶望の極みは、終身ひとりにて、世をあぢきなく送るに至り、或は、後ぞひとなりて人に云ひけたれ、或は、始にも劣りたる處に心をまげて、世にあなづられなどする女子、この頃は殊に多かりとぞ。かゝる處よりして、女子に、あまり多く學問さする時は、あらぬ者になるとぞ、

世の物しらぬ父兄は云ふめる。

●己を知る　と云ふ事、人には必要なり。故に唐土にも、貧者の財を以て禮とし、老人の力をもて禮とする事の過なるを戒めあり。もし貧者にして、富者と同じく、金錢を費したらんには、忽ち云ふべからざる困難に陷いるべし。又老人にして、壯年の者と同じく、力を用ゐたらんには、病を引き起こすこと疑なし。是皆己を知らざる結果なり。故に男にまれ、女にまれ、己を知りて、其の分に安んずるを第一とす。前にいはゆる、あらぬ望を起こして、一生を害ふ女子も、己を知らざる過なり。且又、師範學校や、高等女學校などを卒業したる女子は、漸く一人前の女子となりぬる迄にして、決して、學問あり知識ありと云ふべからざるものをや。鳥なき里の蝙蝠と同じく、世間おしなべて、片わの女子ばかりなれば、我が目より我を見る時は、いみじき女子の如くなれども、外より見る時は、矢張蝙蝠は蝙蝠なり。一人前の女子は一人前の女子なり。鳥にも非ざれば、いみじくも非ず。此のことわりをよく知らぬ人は、假令、學問しても、世に擯斥せらるゝあり。此は、啻に學問上のみならず、萬事にわたるべし。我が姉妹等には、さる人あるまじけれど、他山の石は、以て、我が玉を研くに足るべけれど、朝夕の戒となし給ふべきなり。

●孝女門前の落歌　奧州宮城の六郷村平塚あさ女は、貞節素行の名高く、賞狀及び金員を下賜されたるが、近頃同人の宅前に、何人とも分かず、

金若干に、

　身を深め吹雪の中を恐れずに
　　道こそ守れ松の葉みどり

の一首を添へありしとぞ。と『日本』といふ新聞に見えたり。あはれ。孝の徳大なる哉。神聖ある吾が國も、一度西洋の、卑しく陋き風のふきすさびしより、いたく、くだちゆける今の世今の時、をやみなき吹雪の中に、ひとり立ちて、操かへぬ松の綠の、すぐれてめでたきは、云ふも中々なりや。こはもとよりなれど、偶々さる人ありとも、顧みる人だになき世のさまなるを、この落首のぬしよ。さても心ある人にはありけり。この孝女を、吹雪に操かへぬ松にたぐへなど、この落首のぬしこそは、深雪の中にも、香細しきかをりを放つ梅ともいふべけれ。

●雪　は鵞毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を着て立つて徘徊すとは、彼の唐詩に巧なりし白樂天が詞なり。實によくも雪降のけしきを形容したるものかな。去る一月廿九日は、朝まだきより降りしきりて、をやみなく夕暮に至りぬ。見るがうちに、見わたす限り、白銀の世となりて、云ひしらぬ眺は、筆にも盡しがたし。北の國に住み給はん人は、なか〳〵に憂きものとも見給はむなれど、霜だに置かぬといふ南の國は、またかゝる景色を、うらやましとやかこち給はむ。この東の京は、憂しと思ふまで降ることもなけれど、又珍しといふまで降らぬといふにも非ず。されどいぬる日の雪は、又近頃、いと〳〵珍らしき雪にぞあ

りける。されど、記者も、一首の腰をれをうなり出でぬ。

ふる雪の清き心を人もたゞ世のうきことも消えやはてなむ。學の庭を立ちならし給ふ姉妹等は、なぞたゞごとなるとて、手をうちて笑ひ給はむ。あなうしと。

●類題歌集　新に世に出でたり。すべて、歌詠まむとするもの丶參考書としては、必類題の歌集を要すること、いふも更なるべし。されど、これまで行はれてし歌集には、適當しきもの甚少く、またその數も多からざるをもて、普くは世に行はれで、いとく遺憾なる事なりしが、杉谷三橘の雨君は、大にこれを憂へられ、歌學者の便益を圖り、且は普く世に廣ごらせむとて、この程、標題の如き一書を編輯し、古今の名歌數萬首を類聚して、あらゆる歌題を網羅して、之を十二卷に分かち、至りて簡便なる方法を以て發兌せられたり。歌詠まむとするもの、もし一度この書を得たらむには、その便利を感じ、利益を受けむこと、吾人の斷めて保證する所あり。吾人は、大方の世の婦人等が、たゞ無益の稗史小説等を手にするに代へて、かくの如く有益なる書物の、文机の邊に堆からむことを欲して止まざるにつけて、こゝに、この書の出板せられしを、嬢等に紹介しまゐらするなり。委しくは別紙廣告にあり。第一卷は既に成りぬ。必購ひて備へ置き給ふべし。

餘芳

みくるまのあと（つゞき）

八木をはなれて、田原本までは、川ぞひの堤道なり。田原本にいたれば、例のみ迎の人々、いとおほし。ことに裁縫教員とか、むらさきの衣に、ひのはかまきて、うちそろひたる、いとうつくしうみゆ。このさとは、戸數六百あまりといふ。みとまり淨照寺につかせたまふ。午後三時五十分なり。けふもつかせたまひて、後、五時すぐるころより、雨ふりいでぬ。夜になりて、花火あまた、うちあげたり。またさとのこどもの、まひ、琴などつかうまつるを御覧ず。このさとの花火は、ことにめづらしく、數もおほかりつれど、あやにくに雨ふりて、火のとくきえしは、いと口をし。

廿三日、雨ふる。けさも猶花火あり。九時にたゝせたまふ。みとも例のごとし。田原本を、八尾のかたへいづれば、法隆寺の道なり。寺川のおほはしをわたりて、唐古にいづ。川田村をへ、初瀬川の天神橋をすぎて、布留の枝川あり。はしあり。菅原橋といふ。これより二階堂村にいたる。西は平群郡、東は山部郡なり。田中の道

にて、みわたしいとよし。されど車あらずば、おきもしつべき、ながてなり。それより、添上郡治道村にいたり、高瀬川の横田ばしを渡れば、又佐保川のゐづゝ橋あり。この邊、すべて井筒村なり。此の川は、添上、添下の郡堺なり。みくるま迎へ奉る、學校の生徒など、堤あはせ道に、みち〳〵たり。をりしも雨風はげしく、雷さへあるに、一木のかげだにおき田中あれば、あまたの人の、ぬれそぼちたる、いたはしうみゆ。これより、富緒川の堤を行。とみのをがはのたえばこそ、よまれしは、これなり。はしあり。米壽ばしといふ。あやしき名なれば、さと人にとひしに、こは近きころ、北畠治勇の母の、八十八の賀に、かけられたるはしなれば、しかいふなりとぞ。此わたり、富郷村字高安といふ。道は大かた、堤のうへなり。法隆寺の入口に、くれなゐの提灯あまた、くものいとのやうに、つなひきわたして、かけつらねたるが、雨にうたれて落たるは、ときならぬ龍田のもみぢを、ちらしたり。みくるまむかへ奉る男、女、法師など、ぬれつゝ行かふさま、わたらむにしきとも、いはまほしう、いとをかし。みくるまは、上宮王院の門を入て、中宮寺につかせたまふ。午前十時四十分なり。そのころ、すこし雨やみたり。さて、ひるのおもの奉り

て、午後二時過より、法隆寺にいらせたまふ。上宮王院の門をいでゝ、たゞちに法隆寺の、中の門をいらせたまひ、まづ右のかたなる、聖靈院にいらせたまふ。それより、樓門のもとにて、みくるまおりさせたまひて、金堂にわたらせたまふ。これは、聖德太子のときのまゝなるものにて、いとありがたく、又たぐひなきものなり。つねには、戸さして、人をいれざるよし。堂のつくりさまよりはじめ、うちの佛像など、げにかみつよのものにて、そゞろにたふとし。これは樓門をいりて、右のかたなり。左のかたは、五重塔にて、現身往生塔としるしたり。こゝにいらせたまへど、このうちには、釋迦の涅槃のさま、淨名、文珠の不二法門のさまなどつくりて、いづれもいとめでたく、古雅なるものなり。それより正面なる、大講堂にいらせたまひぬ。回廊左右にめぐりて、樓門のきはにいたる。大講堂のまへに、かねの燈籠あり。うしろのかたに、上の堂あり。右のかたは鐘樓にて、左は大經堂なり。回廊をめぐりて、左のかた、すこしたかき所に、西圓堂あり。石坂をのぼりて、こゝにいらせたまふ。このとき、雨いよ〳〵はげし。御衣のうるはふも、いとかたじけなし。堂の前に臺あり。みわたしよし。堂のうちの本尊は、藥師如來なり。弓、太刀、

鏡、櫛、笄など、數しらずあり。これは、ねぎごとのかなひし男女、かへり申に、奉れるものありといふ。かへさに、上宮王院の門をいりて、夢殿にいらせたまふ。これも回廊うちめぐり、み堂は八角あり。太子の御自作の御像あり。うしろに、舍利殿、書殿あり。書殿は、太子の御一代記を、ゑにかきたるなり。今の名は、後のものにて、ふるくはみゑず。このうしろに、傳法堂あり。こゝにも、いらせたまひぬ。中宮寺にかへらせたまへるは、午後五時なり。法隆寺へ、金そこばくをたまふ。今日は、雨いたうふりしかば、みさきつのうまつりつる警部、その外へ、みきたまふ。よにいりて、花火などあり。

（つゞく）

教の庭

二月五日兼題　海邊霞

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　鹿兒島縣熊毛郡北種子村西之表　平山ゆふ子

さつま潟おきの小島のかずかずも
一つにおしてたつかすみかな

地　千葉縣佐倉町宮小路　植木鋼子

時わかぬ波にもはるのいろ見えて
かすみに遠きおきのしまやま

人　大坂府西成郡今宮村　松田　靜枝

さくら貝ひろひて遊ぶをとめ子の
袖もつゝみてたつかすみかな

松風のおともものどかにうら／＼と　武智卓能子
すまの浦邊はかすみたちゆく

打ちよする波の音さへのどかにて　久保田律子
かすみそめたる春のうなばら

うすくこく沖つ島やまうら／＼と　髙井　繁子
霞みそめたるはるのうなばら

三輪が崎みねわかぬまで朝がすみ　勝家　貞子
あみぢはるかに立ちこめに鳬

春かすみたなびきにけりしほ竈の　松井たまみ
うらのけぶりも見ねわかぬ迄

わたつみの海にも春やきたるらむ　大鐘きよね
波のうへ遠くかすみたつかな

あま小舟かへる波ぢも見えぬまで　狩野　秀子
霞こめたるはるのうら／＼

東風ふけど何所（イヅク）ともなく春の來て　長谷　榮子
あまのとまやも霞みこめたり

かすみたつ春の海邊にきて見れバ　久保　松子
海士のを舟ものどかなりけり

須磨の浦藻鹽のけぶりたちこめて　瀨戶さと子
いろ山とほくかすみたなびく

行くふねの帆かげもきえて大淀の　森田てる子
まつよりかすむ春のゆふぐれ

霞たつ伊良子のさきのゆふぐれに　森田とく子
おぼつかなくもかもめとぶ也

笛の音を浪にのこしていづる舟の　森田とき子
けぶりもかすむ春のあけぼの

春かすみいとゞ深くもたちにけり　伊藤　海子
いろのうら／＼見えわかぬ迄

長閑なる袖しの浦のなみのうへに　伊藤ちゑ子
たなびくものはかすみなり鳬

入しほぢの汐の八百路もかすむ也　冲田みさを
いろの松かぜおともしづかに

常はたゞみどりに見えし海ばらも　靑木はる子
かすみのほかの色なかりけり

かたを浪和歌の浦わに鳴く田鶴の　横山きみ子
磐をへだてゝ立つかすみかな

うちわたすおきの島山ゆきゝえて　田村千代子
海はかすみにうづもれにけり

押しなべてかすみたな引く塩釜の　小畑　種子
けぶりも浪に立ちまよふらむ

遠近のしまもかすみの立ちこめて　上原とみ子
おき行く舟のゆくへしらずも

行く舟のかげをしまるゝ朝ぼらけ　井出ゑつ子
うたてかすみの立ちかくす哉

あさぼらけおぼろ月夜の名殘とて　松田　孝子
海むらつゝむはるがすみかな

釣舟はかすみのおくにうかぶらむ　松田つぎ子
なみ路にかぢの音ばかりして

ひれふりしむかしおぼえて松浦潟　松田みね子
霞にまよふもろこしのふね

朝ぼらけ浪も音せでみるがうちに　橋本數江子
かすみの海とはやなりにけり

歸るさも思ひやられて見ゆるかな　橋本りやう
かすみの庭にしづむつりふね

いづものうみ神代の昔おもはれて　橋本めぐみ
八重垣つくるはるがすみかな

朝かすみたちこめにけり明石がた　楢崎　光子
いはうつなみの音はかりして

聞きなれし海士の小舟の綱手より　中村　友子
なほ嬉しきはかすみなりけり

八重がすみ一重〱に消えそめて　川井田さよ
ほのかに見ゆる三保の松ばら

風たえてのどかにかすむ大いその　河野はる子
いその松ばら見えわかぬかな

のどかなる春の海邊のあまをぶね　河野みゑ子
陸のかすみをなにと見るらむ

浦風もふきをさまりてのどかなる　南大路素子
かすみに遠きあはぢしまやま

さほ姫のかすみの袖につゝまれて　南大路正子
浪ぢのどかにうらかせぞふく

朝ぼらけ汐路はるかにゆくふねの　南大路芳枝
おとよりかすむ浪のうへかな

二月五日兼題　探梅の記

天

香川縣松山市萱町六丁目　田村千代子

雪は高嶺よりふりつもり花は麓より咲いづとある翁の敎へたる言のはを枝折にまづ麓のかたよりぞわけゆく山風のほのかにえならぬ香を吹おくれるは花のありかを告るにやといとうれしくてふかくたづねいるにひともとの梅の梢の南にさし出たるが半ばころびて鶯の鳴音おそしとまち顔なるいとをかし高根にいまだ白雪の消のこりて大かたの梅はけしきだにも見えぬをこゝにのみ吹風の打ぬるみて春のひかりのいとあたゝかなるは山ふところあれぱなるべしさてしも梅は山ふところより咲そむとてこそ人にはをしへつべけれ

地

福岡縣生葉郡市杵高等小學校　上原とみ

我校の南程遠からぬに大生寺と言ふ寺あり地高く望宜しきがうへに四時の花木さへ少からねば春秋に人の多く集ふ所なり今年二月五日心合へるどちと人に見られぬ花見んとて朝またきより出立ちぬ小やかなる破子など携へて田圃の間をたどり巨瀬川打渡りて村の小やかあるすぎて大生寺山にぞかかる道のべの露も緒に貫きてんとめでらるいや登りに登るほどに肌さへ温まりてよそのけしきもやう〳〵見えわたるいまし日は東山の上にさしのぼり遠近の山々にきえ殘れる雪にかゞやき渡れどはや麓には霞たなびけりかくて寺に至りつきぬ日ころの雪にまだしもとや思ふらん人の影だになしいでや君はいづこにとて堂の前鐘樓の側など探すに桃櫻あどみなかれ〳〵にて雪霜におやめるいと心許なしさて僧房の後園に至りて爰にぞ梅はありける主人の培養至らぬ方なくて幹のふり枝のさまなど尋常ならず世に誇りがほに咲き出でたるいとめでたし僧室にまどゐし或はその化に魁たるを稱へ或はその雪に撓まぬ節を賞むる說など多かりそれより梅と主人に別をつげ例の巨瀬川を渡るとて向の岸打見やれば小蔭深き藪中に星か霰かとばかりほの見ゆるものあり近き見れどこち〳〵しき枝に

苔むしたるが巖に番まりて梢はのかにさし出で今を春べと咲けるなりけり何とあくねびまさりて香さへにるものなくめでたしあはれ文王の呂望に逢ひけん心地もかくやと思はれて立ちもえ去らずさきに見し庭中の梅ども物の數かはまして桃櫻をや實に非常の人傑は巖窟にこそ求むべかりけれと人々稱へつゝ去りぬ奇遇などて記なかるべきとかくはものしつ

人

岡山縣英田郡河會村河會尋常小學校　沖田みさを

或日うめさぐらむとていでぬ　道もなき茨の中を分けもて行けども〳〵見わたらず足もいたくつかれぬれどいざ此處にて一休みせんとて大なる岩の上に毛布打ちしきて腰かけぬ折しもさと吹きくる風のおのづからかうむしくおぼえて見かへりすればゞ其後なる老木の花三ッ五ッさきたるにてなほみれば其わたりにもありけり嬉しきことかぎりなく各も〳〵顔見合せてはゝと笑みけり　かくて黄昏のころほひ迄あちこちありきめぐりてさて書齋の友にもと一枝をりてかへりつ

探梅の記

中井　竹子

日ごろしたしうかたらふ友どちかれこれを打つどへ茶湯のわざをものせんとてひたすら其日の事どもを用意しけるに小瓶にさしたらんはよろづよりも梅こそことにめでたけれとて近きわたりをそこはかとなうたづぬれどいまだ蕾だになき梅のいとさびしげにたてるのみなりつぬの年ならんにははやなかばほころびぬるをなど今年はおそかりけんなどひとりごちつゝなほあざる程にはるかに見ゆるをちの高ねにはまだ去年の白雪の殘れるもあれど野邊は名殘りなう消えうせてすみれたんぽゝなど春しりがほにもえ出でたるもなかしいでやせめてこれをだに家つとにせんとて思ひのまゝにつみつるうちそよ〳〵と吹きくる風にえならぬにほひのしてければいとあやしみつゝ其香をしるべにたどれば一つのあやしき草の庵ありけりろが軒端に白梅のやう〳〵三つ四つはころびそめて人待ちが

ほにほゝゑみたるはまたたとへんかたなうめでたけれバいかなる人の住居なるにやとあるじさへゆかしう思はれてしバしたゝずみ居たるに年は十を二つ三つバかりこえたらんとおぼしき女のわらは出で來つれどあはれ一枝たまはらんやと乞へるにいと心よくうけがひてまだ鶯もしらぬまの初花ををしげもなう手折てたぶにぞ今日は朝まだきよりたづねわびにし花のやう／＼得られたるうれしさにいそぎ歸りてかくはしるしぬる

勝家　貞子

もの靜かなる春の夕まぐれ朧月夜のをかしきに端近く立ち出づれバいづこよりか春風のさそひきにけむ梅が香に心ときめきつゝ我にもあらずうかれいでぬればやがて梅の林にいたりぬ梢の花は雪かとまがふばかりに咲きみちて白き紅とり／＼に月影に色をはえ吹く風に香をみだして世にいひ知らぬけしきなりされバ時の移るも知らでかなたこなたとめではやすうちにやう／＼月影の傾きて吹き來る風の身にしみぬれば女の身として夜深きそゝろあるきはと打ち驚きて心あわたゞしく家に歸りぬるに母上もまた心つかひせさせ給ふをりなりけり

久保　松子

新玉の年立かへりぬれバ空のけしきもうら／＼と日も心のどかにてりわたりて梅花さへいつしかさきいでぬ春風のたよりにえもいはぬにほひををりおくりこせバ谷の鶯もふるすをいでゝ花やかに鳴きはじめけりわらはもこの春風にさそひいだされて梅見に行きぬ花いみじうあるところをみればまことにこと木はまじらずはるかよりながむれバたゞしら雪とみゆれバ

はるかなる梅さく山を見渡せバ
　　ふりつむ雪とあざむかれけり

中村　友子

鶯ははや谷間を出て鳴き始めぬれどまだ梅の花は咲き出でぬにやあらん尋ねがほなりいでや鶯よりも先きに探し出でなんとて友どち二三をそゝのかして凍るばかりの北風を冒し片山里を指して出行きぬ左の道を曲らん否右にてこそ梅は咲くらめなど

言ひあらそひつゝ行けども／＼枝だに見えず今はたゆみはてゝ空く歸らんといふを打消して雪霜をさへ凌きて咲き出る梅見んとたま／＼寒を冐して來しものを探しいださでやはとて中々に聞かず折しもゆくりなく妙なる香の薫りぬいづこならむと見廻せむ荒垣の中に早梅の南枝に二つ三つ咲き出でしなりけり皆小躍して打喜ぶに妾

梅の花いざこと問はん鶯の
　我より先きに尋ね來しかと

かくてあるじにこひて一枝を手折り家づとに持歸りぬ

海邊霞　延着

磯ちかくよせくる波の音はすれど　佐藤　敬子
　かすみに見えぬ春のうなばら

あし北の野坂のうらわかすみけり　佐々有鄰子
　水島のおきもみえぬばかりに

春なれやかつぎのみする蜑の子も　千々波橘子
　けさは霞のころもきぬらん

ときはなる緑のいろもうら／＼と　遠藤八重子
　霞にはふまつがうらしま

朝風になびくかすみのたえ間より　濤川きは子
　ほの見え渡るおきのしまやま

おきつ島かすむ波間にほのみえて　飯田うめ子
　磯邊のどけきはるのあけぼの

うら／＼と浦わの千舟ほのみえて　雲井なほえ
　霞むなみまにとほざかりゆく

海士小舟ほの／＼みえてうち霞む　濤川けい子
　なみぢしづけき春のゆふなぎ

和田の原おきにたゞよふつり船の　堀内　安子
　ほのかに見えて霞むけふかな

はてもなくかすむ塩路をあま小舟　宇多田楊子
　いかにさしてか漕ぎ渡るらん

探梅の記　延着

佐々有鄰子

梅はこゝの園かしこの庭に枝をため幹をつくりたるとり／＼なれど天然の紅白をさぐらんとおもふ

をりから中垣のへだてある處女たちかたまゐゐみふぐしもち野べのわかなつまんよりも山かたまけるをたづねてましをとそゝのかされてやをら立いでぬ昨日の雪もあとなくきえてうら〳〵とさし出る日なたはこりに鶯のひとくとつぐる聲をしるべに立よる木末にはいまだつもりたるかと思へば今を盛の花にぞあるはかられぬるも心のまよひあるべしなほ山ふところにわけいれば夕日にこがるゝ雲にまがひてをがやかりふき世をのがれつらん人のすみかなるべき軒ばをつゝみたりあなさやけき色にもあるか心なく一枝ををらむ一しをやきられんたのしくゆかしき今日の山ぶみなるかも袂にふかうしみつきぬるかをりを焼ものゝけふりにかへて文机のもとに燈火かゝげてしるしぬ

兼題

二月廿日
- 歌　梅薫枕
- 文　細川忠興夫人の傳を讀む

三月五日
- 歌　待花
- 文　蝋燭といふこ[illegible]

投稿心得

兼題歌文は婦人は何人にても投稿することを得但し一週日前に本社に届くやうせらるべし

宛書は必ず國光社編輯部御中とし用紙は白紙にても罫紙にても半紙形を用ゐ文字は鮮明に書かるべし

投稿歌文中より天地人の三首を撰り天に三部地に二部人に一部女鑑を送り且すべての其他の歌文は悉く原稿到着順に本誌教の庭に掲載すべし

女鑑第三十一號目次

女鑑
婦道の起源

論説
女德の衰敗を歎く……大林弘一郎
女子要言(第二回續)……三輪田眞佐子

史談
松尾多勢子傳　三輪田眞佐子●奇特者せんが事　片岡正占

家政
育兒小言(三十)　武谷水城●料理法(十二)　待月荼●看護法捷徑(八)　三笠舍主人

學園
女子書牘文論(承前)目黑和三郎●文學小傳(承前)難波津淺香

漫錄
桂園翁直話　大口多比之●古今集傳授一班　森馬太●女誡和解
內藤燦聚●吉田松陰の書簡●手鞠歌　あゝま●三井家婚禮式
長屋基彥
畫師の妻……江見水蔭

文林
歌　近衛忠凞●阪正臣●西川須賀雄●片岡正占●藤井行麿●神本國臣●佐々豐水●關大久樂●坂本德一郎●三輪田眞佐子●安東菊子●平塚千代子●小澤幸民

雜報
御歌會始●皇后宮陛下の御仁慈●今の赫夜姬●女の歌ふべきものは●さて歌ふべからぬは●そゞろありきの記

歌の庭
歌文　數十首

口畫……松本楓湖
挿畫……富岡永洗

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麹町郵便局へ御振込可被下事○郵便券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し强て領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未税の來書ハ一切受取不申候事

女鑑

毎月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金十五錢

明治廿五年三月十二日遞信省認可
明治廿六年二月四日印刷
同　年同月五日出版

發行兼印刷人　東京麹町區平川町六丁目十二番地　川崎直衞
編輯人　同　東京麹町區平川町五丁目十六番地　山根勇藏
發行所　國光社

國光は忠孝節義の士氣を激勵し固有の美風良俗を扶植し以て邦家進取興隆の基礎を鞏固にし殖産軍備教育の法廣く宇内の秀美を蒐め富强の策を講するを務とす其時事を評し活勢を論ずるに當りては公平の眼を以て大局の上より國家の利害を觀察し太古に溯り萬世に亘り時流を趁いす世好に投せす卓然獨立正言公議眞理中道を得以て國光を世界に照被するを旨とす

國光

毎月二回發行
十日廿五日
一冊代金拾三錢
但全國無遞送料

國光第五卷第七號目錄

○國光
躁進輕擧以て此帝國を誤る勿れ
憲法宣布の勅語を陳べて志士の注意を喚起す
○鏡の影
三善清行傳(承前)
○劒の光
勤王論……天野御民
和衷協同の實効を表すべし……寺師宗德
世を慨して教育に及ぶ……五條爲明
敢て太方の君子に訴ふ……榎元久福
勅諭參釋……内藤燦聚
○瓊の德
詩歌數十首
○文の園
日本國志序……川口翯
三井嶺……鹽谷時敏
高杉東行入筑始末緒言……江島茂逸
賄賂論……澁谷立本
○筆のすさび
梅花錄(第十二回)……雨峯樵夫
○暗路の光
東京感化院教務の實況
○大和錦
書經大禹謨講義(承前)……元田永孚
毛利家撫育局之記(承前)…品川子爵寄贈
志を立つるのふみ(承前)…小山正武寄贈
父兄訓(承前)……某氏寄贈
○時事
●歌御會始●東京日々新聞の大不敬●遂に停會●廿三日至る●是より先●利口●大言壯語●海軍大尉郡司成忠氏●神祇官復興上奏案●日置政太郎傳
○學の海
皇國古史紀年考……吉岡德明
挿畫……武内桂舟

發行所
麹町區平川町五丁目
國光社

(遞信省認可)

(國光社印刷部印行)